讀鄉讀本

特275
376

始

神代御略系

天之御中主神―高御產巢日神―神產巢日神

- 伊弉諾尊
- 伊弉冉尊
- 天照大神―天忍穗耳尊
- 瓊瓊杵尊―彥火火出見尊
- 鸕鷀草葺不合尊

神代三山陵

- 可愛山陵（瓊瓊杵尊 川內市）
- 高屋山陵（彥火火出見尊 姶良郡溝邊村）
- 吾平山陵（鸕鷀草葺不合尊 肝屬郡姶良村）

明治天皇御製

子等はみな戰の庭に出で立ちて
翁やひとり山田守るらむ

事しあらば火にも水にも入りなむと
思ふがやがてやまと魂

穂千高峯

西郷南洲翁

島津齊彬公

山下國民學校

學校沿革

○當校は元第三鄕校と言つて、明治六年八月設立せられた。
○明治十年の兵火にかかり燒失し、翌十一年十月區内の有志者が力をあはせ前校を改築し、更めて山下小學と名づけた。
○明治十九年學制の改正により、山下小學校と改稱した。
○明治二十二年森文部大臣が親しく當校の教育狀態を視察せられた。
○明治二十三年北白川宮能久親王殿下御台臨遊ばされ、當校兒童の成績品、体操を台覽あらせられ、遊戯大將倒しは殊の外勇壯であると仰せられた。
○明治二十四年一月十九日勅語謄本を下附せられた。
○明治四十年十月皇太子殿下鹿兒島に行啓に際し、校旗を制定し、同時に紋章を以て徽章に定めた。
○昭和三年十月七日創立五十年記念式及び祝賀會を擧行した。
○昭和三年十月十二日御影を下賜せられた。
○昭和十年十一月　天皇陛下鹿兒島に行幸に際し、當校は熊本地方憲兵隊本部並びに同宿舍にあてらた。

序

薩隅日三州の地は古へ日向國と稱し天孫降臨皇祖發祥の靈地であり、日本に於て最も歴史の古く且つ豐富なる地方である。鎌倉時代のはじめ島津氏の始祖忠久公此地に封ぜられて以來二十九世七百年歴代英邁なる藩主出で、海内隨一の雄藩として知られ此地に剛健質實獨特の士風を生ずるに至つた。

徳川幕府の末葉内外多事の秋に當り第二十八代齊彬公聰明にして雄略あり天下に率先して尊王の大義を唱へ文を勵まし武を錬り、一藩の士氣を振作し久光公、忠義公其の遺業を繼承し、藩内英雄豪傑雲の如く輩出して遂に維新回天の鴻業を翼賛するに至つたものである。

中に於て鹿兒島城下山下國民學校の校區は人材を出すこと最も多く、西郷南洲、大久保甲東の兩雄をはじめ、日清日露の兩戰役には陸の大山、海の東郷兩元帥外多士濟々一時英雄の淵叢たるの觀を呈した。よりて山下校諸先生是等偉人の事蹟を顯彰せんとして簡單なる傳記を記し、且つ偉人の背後には必ず賢母のあることを知らしむるために其の傳記をも併せ記さるることとなつた。

今や大東亞戰爭開始され、皇軍の向ふところ敵なく、既に太平洋上到るところ日章旗の飜へるを見るに至つた。思ふに大東亞經略はわが肇國以來の大精神であつて、齊彬公之を熱心に唱へ南洲翁亦之を實現されんとしたものである。されば是等鄕土偉人の傳記を顯はし若き生徒諸子をして日夕之を誦讀せしめ先人の偉烈を繼承せしむることはまことに意義深き事にして、余は雙手を擧げて賛意を表するところである。欣喜の餘り不敏を顧みず此處に蕪文を草した。

昭和十七年秋

第二鹿兒島中學校長　池田俊彦

序

山紫水明、天孫降臨の聖地に我等は生をうけ、第二十八代の太守島津齊彬公を祀る照國神社を氏神様と仰ぎ、薩藩に於ける平田靱負翁外幾多の義烈の士、維新の元勳、西鄉・大久保兩先生を始め、更に東鄉・大山の兩元帥等明治維新以後に於ける忠勇元勳の誕生の地に育ち、それ等先人の賢母の敎を偲び、そのかみ此等大先輩の方々が少年時代に心身を錬磨せし、幾多の學舍や老樟の木影、或は嬉戯せし甲突川のほとりに我等は今、勉學し、鍛錬し、遊戯してゐるのである。

かかる惠まれたる環境を少年團訓練の場とし、之等大先輩の傳統的精神を範とし、益々感奮興起すべく此處に讃鄉讀本を編纂したのである。

我等は此の十指に餘る幾多偉人賢夫の敎訓事蹟を常に朗誦熟讀し、共勵切磋、此の世界に誇る傳統的大精神に生き、朝夕之れを實踐窮行して、一は先輩の遺德に報ゐ、一は我等の子孫に恥ぢざる昭和の薩摩健兒の美德の建設に邁進しなければならないのである。

我が少年團は國民學校誕生と共に發足し、敎兒一体となつて、國家の指示する少年團精神の錬磨育成に挺身勠力し、綜合訓練に各種訓練に或は基地訓練に日を追つて實績を擧げつゝあることは誠に慶賀に堪へない所である。

我等は此の大日本少年團精神をかかる意義深き鄉土に立脚して日夜錬成し、大東亞戰下の少年とし更に次代を引繼ぐ第二の皇國民として義勇公に奉ずるの精神と不屈不撓の体力を養成せねばならぬのである。

諸子は此の讃鄉讀本編纂の趣旨をよく理解し、朝夕熟讀玩味して、益々奮勵努力せんことを望む。

昭和十七年秋

山下國民學校　校長　永瀨親雄

御家老座の銘

いにしへの道を聞いても唱へても
我がおこなひにせずばかひなし
思ほえず違ふものなり身の上の
慾をはなれて義を守れ人
もろ〳〵の國や所の政道は
人に先づよく教へならはせ

西郷南洲先生遺訓

○人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己れを盡し人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

○過を改るに、自ら過たとさへ思ひ付かば夫れにて善し、其事をば棄て顧みず、直に一歩踏出す可し、過を悔しく思ひ、取繕はんと心配するは、譬へば茶碗を割り、其破片を集め合せ見るも同にて、詮もなきこと也。

○命もいらず、名もいらず、官位も金も入らぬ人は、仕末に困るもの也。此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

○道は天地自然のものにして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆえ、我を愛する心を以て人を愛する也。

目次

第一章
明治天皇御製
神代御略系と神代三山陵
讃鄕寫眞四葉
學校沿革
序文
御家老座の銘
南洲遺訓
第二章
島津齊彬公……1

平田靱負翁……一八
西郷南洲先生……三一
大久保甲東先生……四三
東郷元帥……六一
大山元帥……七四
島津賢章院夫人……九五
乃木靜子夫人……一〇一
東郷益子夫人……一一七
山本ノブ子刀自……一二七
税所敦子刀自……一四一

島津齊彬公

齊彬公の母堂

城山の南の麓に照國神社があります。皆さんは毎月の大詔奉戴日にあの大きな白い鳥居の下を潜つてお詣りします。あの照國神社には誰をお祀りしてありますか。それは島津齊彬公ですね。私はなぜ島津齊彬公が神様として祀られてゐるか、どんな偉い人であつたかといふことについて述べたいと思ひます。

島津齊彬公は我が薩隅日三州の第二十八代の藩主で四十三歳の時に家を襲いだのでありました。ずゐぶん年取つてからの家襲ぎであります。其の間は江戸で修業しました。母堂は有名な賢章院夫人でありました。賢章院は學問にすぐれ詩や歌もよく作りまた薙刀の名人でもありました。幼年時代の齊彬公の教育には格別熱心で自分で漢文の本を教へたりしました。時には昔の偉い人々の話などをしました。或る時齊彬公のお守役の長崎良右衛門が母堂に

『時には、よく出來た時にはほめて下さいませ。』

と言ひました。賢章院は

『いや〳〵、將來三州の太守とならねばならぬ身であるから學問に精を出すのはあたりまへの事だ、ほめの言葉など相ならぬ』

と言つてゐます。このやうな心構へで賢章院は教育したので齊彬公のかしこさはだん〳〵あらはれてきました。

夫人はこのやうに學問上のことについてはきびしくしましたが齊彬公のかねてのくらし方についてはまことになさけ深く取扱ひました。ところが賢章院は齊彬公の十六歳の時になくなりました。其の時賢章院は三十四歳でありました。昔から偉い人の影には必ず偉い母があるといはれてゐますが齊彬公が偉くなつたのも母堂の力が大分加はつてゐると思ひます。

西洋文明の研究

齊彬公は幼少の時から支那や日本の學問に勵むと共に、西洋の文物を研究しました。この研究はひとり薩摩のためになつたばかりでなく日本のために役立つたことは大へんなものでした。齊彬公の曾祖父は第二十五代重豪公と申す此人が始めて西洋人と會つたのは、ドイツ人のシーボルトといふ人でした。重豪公は老齢でありましたがなか〳〵の勉強家で、動物學、植物學それから醫學その他いろ〳〵な勉強をしました。非常に元氣のある方で年取つても藩の治め方についても心配し更に學問の研

究はます〳〵深まるばかりで、その進んで仕事となさうといふすぐれた元氣、大きな志を持つてゐることは、其の時代天下に三百余の大名が居りましたが誰も重豪公に及ぶ者はなかつたといふことであります。又支那語も勉強しローマ字を書き和蘭語も研究して居られます。

然しこのやうに西洋の學問ばかり勉強して日本のことなどそつちのけといふのではありませんでした。我が國体を重んじ、皇室を尊び、山陵の修理をさせたり、などされました。

齊彬公はこの偉いひおぢいさまから非常に可愛がられ、又教育もされたから後に偉くなつたともいへるのです。

齊彬公はこれから段々世界の大勢に注意し江戸で洋學者の人々について和蘭の學問を研究し、自分でも人々にわけを話してきかせたり、又横文字をかいたりして、西洋のことを深く研究しました。それで志は大きくなり國を治め方についてもよい考へが進んできてその頃の大名は誰もかなはなかつたといふことであります。

齊彬公はいつも支那の『孫子』といふ書物にある言葉をぬき出して家來に向つては『外國のよいところをとり入れて自分の足らない所をなほさなければならぬ。そして國はゆたかになり兵隊は強くなるやうにしそして我が國の勢を世界中に張らなくてはいけない』と言つていましめてゐました。

前に述べたやうに齊彬公は四十三歳で家をつぎましたが若い時に修業したおかげで大名となつてか

らの齊彬公は島津家で最も偉い藩主となりました。

集成館とその仕事

我が薩摩は昔から神を敬ひ祖先を崇ぶといふ美しいならはしがあります。齊彬公もやはりこの美しいならはしを引きついで祖先ののこした立派な教へをあらはさうとつとめられました。

皆さんがよく知つてゐる島津日新公の『いろは歌』のわけをみな分るやうに家來にいひつけてゐられます。

重豪公の御仕事の中、造士館や演武館を立てたはじめのわけをよく家來にいひきかせ特に忠孝文武の道をはげむやうにし、祖先のまつりは絶えないやうにしたために家來もすべてよい風になつていき薩摩の勢といふものは大したものでした。

皆さんは磯に集成館といふ建物があることを知つてゐますか。この集成館も齊彬公の仕事の一つであります。齊彬公はずつと早くから西洋の文明をとり入れて日本がひらけ、つよくなるやうに考へて、オランダの學問にくはしい人を呼んで外國の書物を日本語になほし色々な研究を實際にうつしました。

どんなものが出來たかといふと、先づ電信機のつくり方であります。これは電氣のことを知つてゐなければ出來ないのですが、齊彬公はちやんと勉強して他の機械まで作らうと思つてゐたのでした。

我が國で電信機の實驗をしたのは實に鹿兒島が最初であつたのです。皆さんがよく知つてゐる照國神社の眞中の銅像の前に池があります。あの池の前を通つて城山の方に行かうとする所がその電信機の實驗の場所であります。今では記念碑が立つてゐます。そこから鹿兒島城の本丸まで電線を通じて實驗しました所が成功したのです、皆大よろこびでした。

電信機の實驗が成功したので進んでこの電氣を軍事の方面に應用し、電氣仕掛の地雷反び水雷をしかけて、實驗したところがこれも亦非常によい成績でした。いよ〳〵實際に役立つことが分りましたから、その水雷を鹿兒島灣の大事なところに仕かけるやうに前もつてその場所を定めて置きました。それから地雷は鑛山に應用しました。

又寫眞のうつし方を研究し、自分から家來の人々を寫してやつたりしました。それから火藥のつくり方でも我が國では最初に成功しました。その頃は外國との關係が非常に面倒になつて大砲や鐵砲がたくさん必要であつたので、薩摩でこの立派な火藥が出來上つたことが分ると他藩からもこの造り方を習ひにたくさんやつてきました。

この他今まで米からアルコールを造つてゐたのをからいも燒酎から造ることに成功したり、珍しい燒物を自分からつくつたりされました。

それから外國に賣出す物として板ガラスや紅ガラス、醤油等があります。

大砲や小銃の造り方ではあまりにも有名であります。全國諸藩からの注文は絶間なくありました。はじめは大砲の鑄造所たる反射爐のつくり方については何度も失敗し、家來の人々もやめてもらふやうに言ひましたが齊彬公はどうしてもきかず、

『佐賀の鍋島藩でも十八回もかかつて成功したといふではないか、どうして成功しないことがあらうか』

といつてます〳〵はげんだのでとう〳〵成功したのです。一國の大名でありながらこの辛抱强さがすべてのものを成功させました。

齊彬公の勤皇

我が日本臣民たるものは皆皇室に對して尊崇のまごころを捧げないものはないのでありますが七百年來武士が政治の實權を握つてゐたので、皇室では色々御不自由なことが多くありました。御所のこはれを修繕する費用もなく、遠き昔には御即位式の御費用もなく又恐れ多いことには天皇の御葬儀までも日をお延ばしになつたこともあります。

斯樣な有樣を知つて非常に殘念がり悲しみの涙をしぼつた人々も少くはないのですが、これをだまつて見ておれないとして、實際皇室のためにつくしたのは齊彬公であります。

公は島津の家をついだ初に重だつた家來に書物をやつてこんなことを言つてゐられます。

『日本全國のどんな田舍でも自分たちの土地と思ふことは非常なまちがひである。天子樣から國や人民を預つてゐるのだと考へて居ればまちがひはない。』

將軍の尊きを知り天皇の尊きを知らぬものなき世に齊彬公はこのやうにはつきりした考へをもつてゐられました。

又いつか忠孝兩全の道を說いた書物の中にも次のやうな文があります。

『諸大名が第一に考へなければならぬことは國家を自分のものと思ひ家來を自分の家來と思ふことは非常にまちがつた考へであるといふことだ。國家は勿論、士民に至るまで天子樣から預つてゐると思つて、すべてに氣をつけてやつて行かなければならぬ。自分の身にはおごりをせず、人民を可愛がつて行つたならば 千年萬年の後までも 天のめぐみをうけて國家もいつまでも榮え子孫もいよ〳〵榮え樂しむだらうう』

齊彬公は今まで諸國の大名が土地や人民を自分のものだとするわるい習慣を正し、又朝廷のあることを忘れ、德川の恩儀だけを考へる者がゐることをなげいて、日本國中如何なる土地も天子樣の土地でないものはなく、如何なる人間も天子樣の人間でないものはないといふことをはつきりと敎へさと

したのであります。

齊彬公に斯樣な精神があつたればこそ、後になつて薩摩が眞先に立つて幕府を討ち、又薩摩の土地を朝廷におかへししたのであります。

安政元年四月六日、京都では長くも皇居が火災にかかりました。烈しい風にあふられて火は四方にひろがり見る〳〵うちにあちこちの御殿は燒落ちてしまひ　天皇の御乘物までも燃えてしまつたので、孝明天皇は代りの御車で下加茂神社に御避難遊ばされました。その頃皇居は全部燒失せ京都の町も大半は燃えてしまひました。

この頃齊彬公は江戸に居りましたが、このことをきいて非常に驚き、その知らせをきいてからは眠ることも出來ず、夜の明けるのを待兼ねて尾張大納言慶勝に手紙をやりました。それは『皇居が燒けたことは天災とは申し乍ら何とも申し上げられない程長れ多いことだ。それについて自分は暫く外に出るのをやめ、つつしみたいと思ふ』といふ意味でした。齊彬公の忠誠はこの手紙にあふれてゐるばかりでなく、實際皇居を新しくお造り申し上げることについても餘程骨折つたのです。

齊彬公が江戸に行く途中京都に立寄りました時、右大臣近衞忠　から、朝廷がいろいろ費用のことで御困りになつてゐらせられることや、近年幕府から朝廷に差上げる費用もぐんと減つて何程のことも出來ないことなどをきました。そこで齊彬公はどうしても幕府に言つて朝廷の御不自由を少くしたいと考へて水戸の殿樣に相談してそれから尾張の藩主も共に表面に立てて齊彬公自身は影の力となつて幕府を勵ましたのであります。　水戸と尾張の藩主は非常に奮發して、　他の大名にも話がありました。これといふのも齊彬公が熱心であつた證據であります。さて水戸、尾張、仙台、越前、土佐の藩主が表面に立つて、皇居の御造營や、費用を增してもらふことなどを幕府に忠告しましたが、幕府の役人の中にはわけの分らぬ奴が居てどうしてもきき入れません。そこで齊彬公はもう影に居てはとても出來ることではないと考へて、幕府の阿部伊勢守をはじめ他の役人と直接談判を開くことにきめて水戸の藩主に話ました所が、水戸の藩主は京都の事といへばすぐに惡い考へを起すから、もしあなたが阿部伊勢守を向にまはして責めつけるよりも、募府のためだといふやうなふうに話かけた方がよからう。しかしあなたが言つたとほり幕府が實際造り申し上げるかどうかそれは分らぬ。と言ふのでした。しかし齊彬公は幕府が惡い考を起さうがどうしようがかまはぬ、このまゝ控へてゐることは出來ぬと決心して自分から阿部伊勢守と直接談判を開きました。このために談判はよくはかどつて幕府の他の役人も齊彬公の言ふことをよくきいてたう〳〵皇居をお造り申し上げることになりました。それから仕事はずん〳〵進んでやがて立派に出來上りました。この皇居が今の京都の御所であります。齊彬公が自分から進んで談判をしなければこの皇居はつひに出來上らなかつたにちがひありません。當時の諸大名の中で齊彬公が如何にすぐれた志を持つてゐられたかといふことはこれでも分ります。

幕府は其の頃外國との關係のために非常に苦しんでゐましたために朝廷のことなどかへり見るひまもなかつたかも知れません。しかし幕府は朝廷の勢が強くならないやうにつとめました、朝廷の勢が強くなれば幕府の勢が弱くなると考へて色々なことで朝廷に對して失禮なことがありました。そこで齊彬公は、これではいけない。こんなことは幕府のためにもよくない。天下のためにもよくないと心配して自分から筆をとつて幕府へやる手紙を書きました。その下書を家來の重立つた者に見せ、今世の中が非常に亂れてゐて、幕府をはじめ諸大名に至るまで皇室を尊ぶことを忘れ朝廷の御費用が少くてもそれを考へることもなくほんとに心配なことだ。それにつけて、皇室を尊ぶ皇居の守りは勿論京都近くの海をよく守り天皇の御心を安んじ奉るのがこの手紙だとつげました。その手紙は次の通りでありました

第一、幕府は三代將軍家光がしたやうに五六年目に一回は必ず將軍は京都に行つて天皇にお目にかゝりまごころを捧げなければならぬ。さうでなければ、君と臣との區別がみだれてゐること今のやうな場合に天下をよく治めて行くことが出來ないやうになるだらう。

第二、外國人がたび〳〵亂暴しかけても全國の戰の用意が出來て居らず、人々は段々幕府を好かなくならうとしてゐる。こんな時に外國の軍艦が京都に近い大阪灣のあたりに來て無禮なことをするやうなことがあつたら、幕府はどうするか。皇居の守りはまことに心配だ。それでもしもの時を考へて天皇がいらつしやる所をもう一つ奈良につくつてはどうだらうか。

第三、天皇はじめ家家の人々の御困りの有樣はまことに見られない程である。これを幕府にくらべて見ると大へんなちがひがある。幕府は必ず朝廷に御費用を奉り實際に皇室を尊ばなければならぬ。さうすると諸大名もこれにならつて必ず御費用を奉るものが出てくるであらう。

第四、大きな藩に京都大阪を守らせ、そして天皇の御心を安んじ奉らねばならぬ。今のやうに用心してゐないやうでは國家のことがまことに心配である。

第五、將軍のする仕事にきまりをつけ、大事なことがらは天皇の御許しを受けることにしなければならぬ。さうでなければ、皇室を尊ぶことが今日盛んに言はれてゐるから幕府が天皇の御許も受けないで仕事をすれば、人々は幕府を助けなくなり、思ひがけないことが起るかもしれない。

第六、天皇のおそばに仕へてゐる人であつても武道を習ひ、鐵砲や大砲の打方は知つて置かねばならない。これは、國を守れといふのではない。弱い心を振ひ立たせるためである。幕府はこんな所に注意しなくてはならない。

第七、播磨、攝津、和泉の海岸に丈夫な砲台を築き外國にそなへるのが只今の一番大事なことである。さうでなければ皇居の守りを固くし、天皇の御心を安んじ奉ることは出來ない。

これらのことは齊彬公は實によく考へて書かれたのである。ことに、國家の大きな問題については天皇の御許を受けなくてはいけないといふのは、齊彬公でなければ到底出來ることではない。このや

うな手紙に對しても幕府は知らぬ顔してゐたのであります。

幕府は何回も何回も失敗を重ねて、人々は段々幕府を嫌がり始めました。それでも幕府は自分の方が惡いと考へることもなく、ことに井伊直弼が大老といふ一番上の幕府の役人になつてからは、ます〳〵朝廷を何とも思はず、皇室を尊ぶ多くの人々を殺したりしました。朝廷でも非常に御心配なされ、どうも仕方のないまでになりました。

この頃西郷隆盛は江戸に居て江戸の様子を詳しくしらべて鹿兒島にかへつてきました。そして、齊彬公に、幕府の今の有様を今のままには到底ほつて置かれないことや、皇室を尊ぶについてはもうこれ以上考へつかぬ、何とかしなければなりませんと詳しく話しました。

そこで公は、漸く決心しました。自分が京都に行つて皇居を守らう。もうこれ以上がまんが出來ないと決心し、たくさんの軍勢を引きつれて、京都に上るはかりごとをめぐらしました。西郷隆盛はすぐ京都に上りました。齊彬公はそれから出陣の用意をして三千挺の鐵砲を新しく造るやうに集成館に命じました。

齊彬公は隆盛が出發して間もなく七月八日の暑い日天保山の練兵場で薩摩の兵隊の演習を監督してゐられました。天保山は今のやうに家はなく廣い〳〵野原でありました。やがてこの訓練した強い兵隊を率ゐて京都に上らうと思ひたち、熱心に演習をみてゐましたが、急にからだの工合が惡くなつて

館に引上げました。

それからます〳〵病氣は惡くなりつひに七月の十六日になくなつてしまひました。あゝ、まことに殘念なことでした。こんなはかりごとを其の頃の大名で他の誰が考へつきましたか。實に齊彬公は當時三百餘りの大名の中で最もすぐれた人物であつたのです。そのすぐれた人物のもとはやはり忠誠の一念であります。

京都に上るには最も都合の惡い南端の鹿兒島から大兵を率ゐて行くことは非常に大きな仕事であります。しかも其の頃の大名は、朝廷よりも幕府を大事な主人と考へてゐたのです。よほどの勇氣がなくては出來ないことです。その勇氣のもとはやはり何と言つても、忠義の一念です。

國旗日の丸のはじめ

嘉永六年十二月齊彬公が幕府に、白地に朱の日の丸を染め出したのを日本の船の旗にせられたいと申しました。そして直接安部伊勢守正弘に會つて

『大きな船を造つてあちこちに行かなければなりませんが、さうすると外國船との區別がつかなくなります。どうしても外國船との區別をはつきりするため、日本のすべての船のしるしを定めることが必要であります。薩摩に御注文の軍艦もやがて出來上り江戸に送るのでありますが、この場合

早く船の旗を決めて下さつたらどうですか』

と申しました。伊勢守は

『幕府の方としてはまだきめてゐませんが、あなたの考へ出された日の丸の旗は我が日本といふ國の名前からしても大へんよく似合つてゐる。』

と答へて色々話合の末にとう〳〵この日の丸の旗を日本のすべての船の印にすることにきめました。齊彬公が言つたことが用ひられたのです。

一体日の丸の印は、日の神と仰ぎ奉る皇祖天照大神の御神德を初めとし大日本の國號、日の出る國といふ日本の場所から考へても必ずさうでなければならぬことであつて日の丸は昔から用ひられてゐたことは用ひられてゐたのですがこれを船印に使ふことを考へたのは全く齊彬公であります。日の丸は見た形は最も簡單でそのわけは最も深く世界にそのためしがないのです。後になつてからこの船印が國旗としてきめられたのはこんなわけをもつてゐるからです。

學問の目あて

齊彬公は學問や武道をするやうにすすめました。學問や武道を練習することによつて國家の役に立つ人間になれと教へたのです。

『學問の目的は人としての道をはつきりとし、我が身を修めると共に人を治めるやうに修養し君や父母に對しては忠孝をつくし、家の名をはづかしめず、國体を汚さないやうにつとめなければならないのであるから文章の字のことばかり知つてゐても、實際世の中での行ひが正しくなければ何にもならぬ。』といましめてゐます。

又造士館（今の縣教育會の所）や演武館にも教を下してゐます。學問をするわけは我が身を修め國をよく治めるにあり、多くの學問が行はれてゐるが、そのよい惡いをはつきりさせないでゐてどれか一つの學問を勉强するのはよくない。世の中がよく治り人民が安心して生活することが出來る正しい學問を勉强しなければならぬといましめました。

齊彬公の逝去

齊彬公は鹿兒島の海を守るために多くの砲台をきづいたり大砲を造つたり、軍隊の訓練に難儀をしたりしたことは前に述べましたがやはり一番力を入れたのは鹿兒島の軍隊訓練でした。やがてこの訓練した軍隊を率ゐて京都に上り皇居をお守りしようと思つてゐたのでした。

時は安政五年七月八日、部下の全部が集つて天保山で大訓練がありました。齊彬公は馬に跨りこれを監督したのであります。この日は暑さが特にひどく、訓練が終つて好きな釣をして城にかへりま

すと其の晩から熱が出て、それに腹が痛み始めました。翌九日からは晝夜數十回の下痢があり、それを傳へきいた家來の人々の驚きは非常なものでした。西郷隆盛は京都にゐて之を知らず、國にゐた大久保利通は同志と一しよに日夜南林寺に參拜して一心に齊彬公の病氣がなほるやうにと祈願しました。鹿兒島のまちでは皆心配して火を消したやうな有樣でありました。しかし公の病氣は惡くなる一方で十五日の夜中頃になると齊彬は自分でももうだめだと覺悟して弟の久光公を枕もとに呼んで遺言をされました。

『お前の長子の又次郎を後嗣として、お前はよく助け藩がよく治まるやうにせよ。幕府は外國に對するしかたを誤り皇室の尊び方も實際行ふことが出來ず、天下の人々は幕府を嫌がり、騷動が起りさうな風である。かしこくも自分は皇居をお守りするやうに勅をたまはりまことに恐れ多いことであつた。お前は俺の志をついで立派にやつてもらひたい。自分が考へてゐることを十分に成し遂げないでこんなことになつたのは非常に殘念である。自分は死んでもお前は立派に後のことをやつてもらひたい。』

久光公は悲しみの涙をおさへ乍ら

『つゝしんでおうけします。私が命を投げ出して仕事を致します。安心して下さい。』

と答へたので齊彬公は大いに悅びました。公は此の時までは頭がはつきりしてゐましたが、そばに

居た山田壯右衞門に向ひ品物の分け方、手紙類の燒き捨て方などを命じ最後に

『忠孝を重んじ、國家の爲に……』

と言つた時にはもう後の言葉がききとれず、十六日の曉方ついに此世を去られました。其の時年は五十。まことに惜しいことでありました。薩摩全体の人民はちやうど父母を失つたやうに歎き悲しみました。齊彬公死去の知らせが大阪及び京都に達したのは二十四日でありましたが　畏れ多くも孝明天皇をはじめ奉り薩摩の人々は皆顏色をかへて驚き殆どなすことを知りませんでした。中で最も悲しみに沈んだものは西郷隆盛でありました。隆盛はあまりの悲しさに腹を切つて死んで先公の御供しようとまで思つたのであります。然し同志の者がこの樣子に氣がつきよく敎へさとしたので切腹だけは思ひ留りました。天下一般に齊彬公の死が傳はると皆歎き悲しみました。

照國神社

文久三年照國神社が出來たのでありますが、明治三十四年にはかしこくも人臣の極位たる正一位を朝廷から賜はりました。

只今照國神社本殿に近い所にある銅像は齊彬公の銅像であります。

世界的な日本に仕上げた基をつくつた人として齊彬公は諸大名中の第一人者として天下皆仰ぎなつ

かしむ所であります。

平田靱負翁

一、譽の千本松

東海道本線が大垣を過ぎると間もなく汽車は鐵橋にさしかゝります。いう〳〵と流れる川の水は、松の緑をうつし、つり舟が靜かに浮かんでゐます。

見渡すかぎり稻田が續いて、濃尾の平野に夕やみがせまりました。お百姓さん達が鍬をかついで歸つて行きます。

揖斐●長良●木曾と大きな川を三つ渡ると、打ちつゞく大平野を、汽車はひた走りに走り岐阜をすぎやがて名古屋に着きます。

こゝで汽車を乘りかへ關西本線で三重縣に入ると、左に伊勢の海をのぞみながら又二つの川にさしかゝります。三つの川が合はさつて大きくうづ巻きながら又二つに分れて伊勢海に入つてゐるのです。

遠く木曾●飛彈の山中に源をはつし、靜かに、筏とつり舟を浮べるこの川も、梅雨の頃になると水量をまし、大水のため昔からこの地方は困つてゐました。

寶暦の昔、平田靱負以下千餘人の薩摩武士は、刀を鍬に持ちかへて、一年半の苦心の末、とう〳〵この川岸に堤防をきづき上げ、民の苦しみを救ひました。

工事終了後、記念のため植ゑた油島の千本松の緑は、その姿を水の流にうつしながら、いつまでも薩摩義士の名を傳へてゐます。

義士の肉をうづめ、義士の血を流した木曾の流れは、今もなほ昔を語つて、ひた〳〵と岸を洗つてゐます。

經營國土名節ニ殉ズ
遺業千秋義烈ヲ仰グ
志士當年死シテナホ生ク
斯ノ堤君ガ肉此ノ川ハ血

土地の人々は、治水神社を建て、義士の像をまつり、記念碑にしるして長く義士の名を傳へてゐます。

大正五年かしこくも朝廷より平田靱負に對し、從五位を贈られました。地下に眠る義士の靈も、枯骨に及ぶ天恩のかたじけなさに感泣してゐることでせう。

二、櫻島の月

寶暦三年十二月廿五日、木曾川治水の幕命が、我が薩藩に下りました。

その頃、朝廷の命をうけ、天下を治めて居た德川の將軍は、西國で勢の强い我が薩藩を苦しめようとして、遠く離れた木曾川の工事をいひつけたのです。

賴朝の一子忠久公が、文治二年島津莊園（薩、隅、日）の地頭として薩摩に入國してから、代々島津家の勢は强くなり、常に天下の大名は恐れてゐました。關ヶ原の戰に、關東勢を打ち破り、德川を恐れさせたのも我が島津義弘公であり、德川が幕府を開き、天下に號令しながらも、いつも心に恐れてゐたのは我が島津氏の勢でありました。

九代將軍家重も我が島津氏を恐れた一人であります。木曾川の治水の事がきまると、家重は家臣にそゝのかされ、直に工事を我が薩藩にふりあてました。

我が薩藩にしてみれば、木曾は何百里もへだゝつた遠方であり、しかもそこには德川の親類の殿樣が藩主としていらつしやるのです。

お正月も近づいて、お城の庭には白梅が咲いてゐました。ハラ〳〵と散る花びらを眺める薩摩守重年公のお顏は、どんより曇つた冬空の、重苦しい影をやどしてさびさうに見えます。難儀な仕事をいひつけて、『もし命令にそむけば、島津のお家はほろぶだらう。』と言つた老中西尾隱岐守の言葉を思ひ浮かべながら、重年公の眼からは、殘念の涙がはら〳〵と落ちました。

やがて城中の大廣間では、大評定が開かれました。我が薩藩を苦しめようとする幕府と戰をしようといふ者もありました。お家のため恥をしのんで工事をなしとげようといふ考の深い人もありました。二つの考へ方に並み居る家臣はかたづをのんでゐます。

『報負、そちの考をいつてみよ。』

今までだまつてゐた家老平田報負に、重年公は聞かれました。夕やみせまる城山は、次第に影がうすくなつてゆきます。

『普天の下、率土の濱、かしこくも一天萬乘の大君のものならざるはございません。今回の工事は幕命なれど、君命とおぼしめさば、大君の土地、人民の苦しみを救ふことになりまする。先祖代々勤王の御志いとあつき我が島津家、君國のため、いさぎよく幕命を奉ずるが至當かと存じ上げまする。』

大きく勤王の大義に生きる報負のすきとほつた考に、重年公はうなづかれました。

やがて總奉行を平田報負に副奉行を伊集院十藏にお命じになつた公は、滿足げに座をお立ちになりました。

幕府は薩藩を財政上苦しめるつもりでありました。隱密を薩藩に送り、齊田といふ家臣と一しよに

なり、幕府に手向ひするようにはかりましたが、平田靱負の大義あきらかな處置によつて、その計畫は破れてしまひました。そこで總奉行平田靱負を殺して、薩藩をこまらさうとたくらみました。靱負の同志は怒つて、齊田を切らうとしました。人を殺せば自分も切腹しなければなりません。

『血氣の小勇は、思慮ある武士のつゝしむところ、大事な命、大君のため捨てやうではありませんか。』

靜かに靱負にさとされて、思ひとゞまつたものゝ、殘念でたまりませんでした。

『戰場をかけめぐり、君の馬前に一命をすてるばかりが武士の本領ではない。泰平の御代かゝる大工事に一命をかけて從ふも亦本懷だ。』と妻にいひきかせ、覺悟を示して薩摩を出發しました。

時は寶曆四年正月廿九日、春とはいひながら寒い北風がふいてゐます。櫻島の上にはほんのりと有明月の影がさしてゐました。

三、多度の雪

花びらのやうな雪が靜かにまひ下りてゐました。寶曆四年二月廿一日、伊勢の國多度のやしろは次第に暮れてゆきます。

大君のため工事完成を祈る靱負の祭文は、靜まりかへつた境内にこだましてふるうてゐます。

『皆さんの一命を私におあづけ下さい。』といひながら、堪忍の二字をとく靱負の決心は非常なものでした。幕府よりのはづかしめをしのびつゝ、ひたすらに大君につかへまつる固い志をちかひ、土地の人々に迷惑をかけず、薩摩の名譽を重んじて大事遂行の任務を果す心得をさとしました。

『一死以て君國に報ずる決心、且つ堪忍の二字をお忘れなく精勤あるやうひたすらお願ひつかまつる。』

靱負の最後の一言に答へて、家臣の一人は、

『我々の死體を以て埋むるとも、其完成を期する所存、御安堵を願ふ。』

と、言葉涼しく言ひ放ちました。

社頭の夜は次第に更けて、空には星がまたたいてゐました。心中深く決した面々の顏には、一段と希望の色に輝いてゐます。

四、苦節

明けて二月廿七日、いよ〳〵工事にとりかかりました。

機械も材料もなく、工事は最初から困難にぶち當りました。材木や石は遠くの山中から持ち出さねばなりません。

農工商の上に立つ、身分ある武士が、今や刀を捨て、すき、くはを肩に土工を始めたのです。月影をふんで宿に歸つても、風呂もなく御馳走もありません。幕府が村の人々に言ひつけたのです。あんどんのともしびに照らされて、むしろの上に端座した姿は、村人の正直な心をいためました。大切にしようとすれば幕府の役人にきつくとがめられ、かくれておもてなしをしようとすれば、薩摩の武士は

『それには及ばぬ。』とことはります。村人は朝星をいたゞき、夜は月影を踏んで行きかへりする薩摩武士の後姿に、手を合はせて拜みました。病氣になつても醫者も呼べず、とうとう自ら切腹して行つた人もあります。

それにもかゝはらず、戰場にかけめぐる忠勇の心におとらぬ覺悟で働く義士の力で、次第に堤がきづかれて行きました。

四月十四日。四五日以來の大雨で、川は水量をましてさかまいてゐます。中でも木曾、揖斐の落ち合ふ油島はあれくるふ浪にせつかくきづいた堤がすつかり洗ひ流されてしまひました。

永吉、音方の兩人は、降りしきる雨の中に立ちました。運がわるいとはいひながら。あまりにもいたましい姿です。たゞぼんやりとさかまく浪を見てゐました。

雨はいつ止みさうにもありません。日は暮れかゝりました。二人はつひにその場に切腹しました。自分らのなした仕事がよくなかつたおわびをしたのです。川は血を染め、肉を洗つて流れました。

十數日にわたつて降りつゞいた雨はやうやくはれたものの、苦心してやうやくほどこした基礎工事はほとんど全部洗ひ流されてしまひました。そして、たくさんの藩士が死んで行きました。さいしよ豫定したお金も全部使つてしまひました。報負は何度か死なうと覺悟しました。しかし死んでしまへば後の工事はどうなるかと思ふと死ぬことも出來ません。どうしても工事をなしとげるまでは生きてゐなければならない大切な命です。

報負は主だつた人々を集めて會を開きました。さびしくうなだれてゐる列座の人々を見て報負は物思ひにふけつてゐます。苦しい息の底から

『工事中止。』

をのべる報負に人々はふしんのまゆをひそめました。

『豫算超過は何程のことがございませう。見事成功のあかつきに、切腹致しておわび申上げたら、殿も必ずおゆるしのことと存じます。始めから死ぬかくごでゐます。使命を果すまでは死ねません』

と、覺悟のほどを示す諸士をみて、報負はあつい涙をこぼしました。

『工事はいよ〳〵困難にぶち當り、その上、幕府のじやま、皆さんの心中をさぐる爲こんなことを申し上げました。全ては私のつみです。後のことは私が死んでおわび致します。どうぞ皆さん。工事完成のため御はげみねがひます。』

りんとした聲で強い決心を打開けました。一同は暗いあなから明るい所へ出たやうに、いさ〳〵した血が体中を流れるのを感じました。

七月五日、とつぜん、薩摩守重年公が靱負の工事場へお見えになりました。一年たつと江戸へ行かねばならぬのでした。薩摩から江戸へおいでになる途中、わざわざお立よりになつたのです。

靱負らは大へん驚いて殿様をお迎へしました。殿様の行列を拜しながら、靱負らの眼からは、はらはらと涙が流れました。うれしかつたのです。しばらくは下げた頭を上げることが出來ませんでした

『殿にはいつにかはらぬ御達者な御やうす、靱負始め皆の者、御喜びを申上げまする。』

『皆も元氣で。大儀じやのう。』

取りちらした工事場のえん先に、主從は向ひ合ひました。

『何のおかまひも致しませず、不行屆の段、なにとぞおゆるし下さいませ。』

『いや、前もつて申しつかはせば、何かと心をいためるであらうと存じ、だまつて參つた。さぞめいわくであらうのう。』

情深い殿の御一言にすゝり泣く者さへありました。

『靱負、そちやずいぶんやせたのう。』

『は、はつ。』

『なんぎなことであらう。國の爲、大君の爲、予は滿足に思ふぞ。して工事のもやうは如何なり居るぞ。日夜案ずるはその儀ばかり。』

日は西の山に落ちて、川は靜かにさゞ波を立てゝ居ます。つばめが川水にすれ〳〵に飛んでは、白い腹を見せてちう返りをしてゐました。油島の水はいつにかはらずうづまいてゐます。あちこちに殘る木や石は、大水のすさまじいやうすを物語つて、工事のなんぎがしのばれます。

『ききしにまさる大難工事、力落さずつとめてくれよ。』

『費用はつかひはたし、忠勇の士はすでに數名、切腹して相はてましてございまする。これ皆靱負の罪にございますれば、何とぞおゆるしの程を願ひたてまつりまする。』

『いや、そちの罪ではない。金が足らねば、かりて使へ。切腹致せし者、ふびんなことを致したのゝ、けなげな志、あつくとむらひつかはせ。』

なみゐる一同、あつい涙をのんで殿の情に感謝しました。

暑い夏もすぎ、桐の葉が落ち始めました。秋になつて、毎日程切腹して死んで行く者が出ます。今日も二人切腹しました。

またゝく星をみつめながら、すつかり暮れた境内に立つて、靱負は、切腹してはてた人々のおもかげを思ひ浮べてゐました。

『許されよ方々、工事の罪は報負にござる、あゝ。されど工事完成までは死ぬに死なれぬ報負の苦しみ、今しばし待たれよ。其の後において、方々のもとにきつと參るでござらう。それまでのいのち、永らへさして下されよ。』

費用は出來ました。びんぼうな薩摩は、工事に使ふ金がなくて、大阪の商人に借らねばならなかつたのです。喜んで借す商人はゐませんでした。竹中傳六は、よく薩摩に來る商人を知つてゐました。その傳六のたのみでやつと借りることが出來ました。お金を大事に思ふ商人は、お國の爲になんぎしてゐる報負らの苦しみはわかりません。損になることは助けやうともしません。傳六の苦しみは一通ではありませんでした。お金はお國のために使つてこそ、りつぱなお金持だといへます。もうけることばかり考へてゐたその頃の商人には、お國のためといふことが分らなかつたのです。身分ある武士が、商人の前にいくたびも手を合はせてたのむ姿はほんとにあわれでした。それも國の爲と思へば傳六には苦しみではありませんでした。たゞ一生懸命になつてお願ひしました。そして二百七十萬兩といふ多くさんのお金を借ることが出來たのです。

多度の社は、夜が更けて、山の端には三日月がかゝつてゐました。工事完成を祈る報負はこのごろ毎夜かうして多度のお宮に參詣しました。くまなく照す月かげに、濃尾の平野がはるばるとつらなつてゐます。水害さへなければ、よくみのり、國榮えるはてしもなき大平野であります。それが間もなく我々の力で防ぎうるのだと思ふと報負は云ひしれぬよろこびを感じました。

夜がらすが鳴いて夜はます〳〵ふけて行きます。

五、天照寺の鐘

寶暦五年となりました。城山には櫻が咲いて、春を迎へました。

來る日も來る日も、木曾からは死人の知らせばかりで、報負始め藩士の留守をまもる家の人々はさびしさうでした。報負の妻は毎日神様の前にみあかしをともして、工事完成を祈りました。一子千代松は、『花は櫻木、人は武士。』と書いた清書を送つて父をはげましました。

三月廿八日になつて、いよ〳〵工事は出來上りました。

幕府の役人のするどき監視、大水、等あらゆるなんぎをしのんで見事薩摩武士の名をあげました。一時に怒つてする仕事はやすい。しかし一年半の間苦しみをがまんして、仕事をなしとげる事はまことにむづかしいものです。勤皇の志のあつい我々の祖先は、今つひにこの難事業をなしとげたのです。

油島の堤の上に、記念のため千本櫻を植ゑる藩士の顔はよろこびの色にかゞやいてゐます。うづまく浪も見事防いで稻田を守るこの堤、いくた熱い血潮でそめたこの土、涙がとめどもなく流れて土に

しみこんで行きました。

天照寺の鐘が、靜かにひゞいてゐました。報負は全ての人を國元に歸し江戸に送り、一人殘つてゐました。うす暗い部屋を五月の風がわたつて行きます。村の家々からは夕げの煙が立ち上つてゐました。はるかに千本松の綠がつゞいてゐます。

『一足先きにまゐつて、三途の川でお待ちしてゐます。』

といつて死んで行つた藩士もあります。工事完成後、つぎ〳〵に後を追ふて切腹して行く藩士が、あわれでもあり、ありがたくもありました。

千代松の書いた『花は櫻木、人は武士。』の清書に見入りながら、熱い血しほが体中かけめぐりました。『今こそ死ぬべき時は來た。』報負は脇差を手に取りました。

寶暦五年五月二十五日、日は西山に沒し、天照寺の鐘が長く尾をひいて鳴つてゐました。そして暗くなつた部屋にはいつまでも、明りはつきませんでした。噫

千代松が、『花は櫻木、人は武士。』と書いたやうに、報負は武士としての一生を櫻のやうに散つて行つたのです。

西郷南洲先生

一、少年時代の西郷

時は文政十年十二月七日。加治屋町の一隅にある西郷家には、珍らしく大きい男の子が、天も裂けよとばかり、威勢のよい呱々の聲をあげました。いふまでもなく、西郷吉之助隆盛の誕生でありました。

西郷家は、もと南朝の忠臣、菊地武光の子孫でありましたが、吉之助の父吉兵衞は、島津家に仕へて、僅かに勘定方小頭といふ小役を勤めてゐる、大變身分の低い貧乏な士に過ぎませんでした。

吉之助は生れながらにして、人並すぐれて大きな赤ん坊でした。ことに、その眼玉は大きく、黑眼がちでした。この大眼玉こそは、後に人を射る大きな眼となり、また限りなく慈愛を宿す力ある眼となつたのであります。

吉之助の幼時は、だまりがちの氣の利かぬ子供で、一目見たところでは、愚人のやうに見えました身分が低く、家は貧乏と來てゐますから、隨分、他の子供たちから、いやしめられました。それに体だけ大きく、氣が利かぬので、のろ吉だの大眼玉だのと、たえず惡口を言はれたり、馬鹿にされたり

してゐましたが、吉之助は、そんなことには一向平氣でありました。

でも、時によると、人をびつくりさせるやうなことを平氣でやりました。かねてだまつてゐる代りに、一たん思ひ立てば、とても勇敢で、なかなか強く、めつたに人に負けることはありませんでした

それは十三才の時でした。吉之助が藩學聖堂から歸つて來る途中、ふとしたことから友達と爭ひ、とてもすごい喧嘩をはじめたことがあります。

この時、吉之助は右の臂を斬られましたが、それに屈せず、遂に相手をやりこめて、さんざんな目にあはせましたので、仲間の者は、それからひどく吉之助を恐れるやうになつたといひます。

その時、斬られた右臂の傷は、まもなくよくなりましたが、これがために、右臂が眞つすぐ伸びないやうになつてしまつて、一生不自由を忍ばねばならなくなりました。

吉之助は殘念さうに、

『武士は武道を以て身を立てることが常であるけれども、自分は誤つて右の臂を損じた以上、最早刀槍の技をもつて、身を立てることは出來ない。これから大に學問にせい出し、心をねりきたへてやらう。』

と、いひながら、右の臂をなでたといふことです。

二、先生の國に對する正しい考へ方

先生は廣く書物を讀んで、早く我が日本は皇室の下に統一し、團結して、歐米の侵略に當らねばならないといふ大きな正しい考を持つた人でありました。

或時吉之助は大久保公と二人で有馬一郎といふ先生の家へ遊びに行きました。すると先生は、

『どうだ、君達は今の時勢を何と思つてゐるか。』

と質問をするのです。吉之助と大久保は答へることが出來ずに、たゞ眼と眼をみ合つて居りますと、先生はそばの書物棚から一枚の地圖を取り出して、それを壁にかけました。

『どうだ。これが分るか。』

五色の繪具にそめ分けたところを見ると、かねて聞いてをつた地圖に相違ありません。

『世界の地圖でございますか。』

と大久保が口を利きました。

『うむ、吉之助殿は何と見るか。』

『私も、さう思ひます。』

先生は滿足さうに、細い竹をとつて、その地圖を指しながら、

『世界の國はこれだけあるのぢやが、我が日本はどこにあるか、どうだ知つとるか。』

二人は、思はずひざを進めました。眼をみはつて地圖をさがすと、やつと見つかりました。

『あゝ、先生こゝにあります。』

二人は思はずほゝえみました。

『あるか、ないか分らぬ位ぢや。』

と先生はつぶやきながら話をされました。

『このちつぽけな日本の、その中の薩摩は見えるかなう。日本は見えても薩摩は見えない。鹿兒島なんかなほ見えまい。蝸が牛の角の上で爭つてゐるといふことわざがあるが、今度の爭はそれぢやおはん等は今その爭のためにHもなほ足らんのぢや。薩摩ばかりぢやない。どの藩もどの藩もそんなことをやつとる。そのうちにはメリケンや赤ひげどもが、そろそろやつて來る。そのメリケンと云ふのはこれぢや。』

二人は指さゝれたその大きい國に眼を注ぎました。

『どうだ。大きいだらう。今こゝの國から、かうやつて日本の方へ來をる。まるでおはん等が櫻島行をするやうにぢや。それが來たらどうするのぢや。日本は幕府の國ぢやござらんど。幕府のしかたが惡けれや、日本はどうなるかわからんといふのぢや。この恐ろしいあらしの最中に、みんな眠つとる。いや、まだ眠つてるのはまだいゝが、兄弟げんくわをしとる馬鹿者がある。おはん等は、それを知つとるか、どうだ。』

まだ二十才足らぬ青年でありましたが、二人は思はず、ひざに手をついたまゝ、身動き一つせず、先生の口もとをしつかりとみつめてゐました。

『幕府は三百年の泰平になれてしまつて、すつかり油だんして居るのだ。これを思へば、若い血のたぎつてゐるおはん等こそ、これを救はずに、誰が之を救ふのぢや。いや、おはん等ばかりぢやない。藩中の青年、いやしくも有爲の男子は狹いところで、うちはげんくわをよして、同じ死ぬなら大きく死ぬのぢや、あ、はゝゝゝ。』

先生の熱ある話に、二人の者は初めて夢からさめたやうな驚を感じました。

このやうにして、先生の日本を思ふ心はだんだんと培はれて行き、遂に維新の大業は成し遂げられたのでありました。

（三）　禮儀を重んじた先生

先生はよく子供のために談話をしてくれました。主に十四五才以下の子供達を集め、勉强させたりお話をしたりしてよくかわいがりました。

子供等は毎月五六回、時間をきめて、集まりましたが、その時翁は必ずカステラを二きれづゝ與へ、時としては、晝のごはんの時など自分で薩摩汁を煮て食べさせたりしたと言ひます。

或る一日、子供達が、翁の家に集まり、教を受けてゐましたが、一人の少年が、となりの少年に與へたカステラを一きれとつて食ひました。

その時、先生はすかさず、大きな眼玉をして、その少年をきびしくしかつたといふことです。

先生はかねてから、禮儀を重んじ、殊に少年等を教へる際には、かういふやうな少さなことにも、よく注意をせられたといふことであります。

（四） 心の大きい先生

先生の東京におすまひになつてゐる時のお話です。

先生は或日弟從道の家へ遊びに行かれました。その頃、從道は、まだ一人者であつたと見え、一けんのやどをかりて、一人の召使の女をたのんでおりました。

先生が行つて見ると、あいにく從道は、るすでありました。そこで、翁は座敷に上つて歸りを待つてゐました。丁度、ひる頃となりましたので、召使が汁をにて、ごはんを出しました。翁はうまくいたゞいて、書物を讀んでゐますと、やがて從道が歸つて來ました。ところが汁をたべてみますと、とてもからくて食べられません。從道は、これはきつと、召使が汁の味を試すことを忘れたのだと思ひ、早速女をよんでたづねてみると、さうでありました。そこで從道はひどく女をしかりつけ、西郷の前に來さしてあやまらせました。

ところが翁はしづかに口を開いて、

『汁のからいあまいで、どうして人をしかるに及ばうか。』

といつて、少しも氣にかける色もありませんでした。

五、先生の質素な生活

先生は大變質素な方でありました。いつも立派な着物なんか着たことはなく、薩摩飛白（カスリ）の短い着物に白木綿の兵子帶をむすび、外へ出るにも草履、下駄で歩き、木の杖を持つて歩かれました。參議時代には柳製のべんたう箱を腰につけて役所へ出ました。

或日洋服を着て外出した途中行きあつた友達から、

『貴方は襟が逆になつてゐますよ。』

と注意されると、

『さやうか。』

とばかり、一向氣にとめない風でした。

又或る時、宮内省へ出頭しようとして、門まで來ると、ふと、門の札を忘れたことに氣がつきました。そこで、門番にわけを話して通してもらはうとしましたが、

『なりませぬ。』

と言ひます。言葉やさしく幾度も願ひましたけれども、門番はききませんでした。幕府を倒した大の豪傑も門番の一言を破ることも出來ず困り果てて居りました。丁度都合惡く雨さへ降つて來ました。

所へ立派な馬車に乘つて來たのは、これも維新の豪傑岩倉具視公でした。この有樣を見て、

『これは先生、如何なされました。』

とたづね、色々とわけを聞いて、

『これはけしからぬことだ。』

と、門番をしかりつけました。門番は西郷であるといふことを知つて大變驚きました。後、翁は門を通ることが出來ましたが、これによつても翁の質素ぶりが察せられます。

又翁が陸軍大將であつた頃です。大將は日本橋小網町にあつた島津邸の門長屋の一軒を借りて住んで居ました。その家は、三疊に六疊の二間しかありませんでしたが、そこから役所に通勤するといふ有樣でしたから、島津久光は、それを非常に氣にして、

その方も、昔の吉之助ではない。苟くも陸軍大將にして參議であるのだから、もう少し邸宅らしい所に居たらどうだ。この邸は、すつかりその方に つかはすから、明日から直ぐ移つたら どうぢや。』

普通の人ならば、喜ぶところですが、西郷はそれに答へて、

『今の家でも、立派に雨露を凌ぐことは出來ますから、この上に邸宅の望みはございませぬ。』

『でも今の身分としては、どうしても手狹だ。』

『いゝえ、ちつとも不自由ではございませぬ。』

剛情で意の強い久光は、とうとう小網町の自分の邸宅をあけて、西郷へ渡すことにしてしまひました。これには西郷も閉口してしまつて、相變らず自分は長屋に住みながら、朝夕邸内の見廻りをしては、その番をせねばならぬことになつたといひます。

その頃のことでした。政府の大官の集合があつて、西郷の調印を受けねばならぬ書面がありましたが、その日に限つて、西郷が出てまいりません。早速使者を走らせることになりました。

丁度夏の眞盛で、長屋には、表障子がとりはづしてありましたから、廣くもない家の中は、すつかり見えます。西郷は、座敷の眞中に、すつぱだかのまゝあぐらをかいて居りました。

『閣下、お迎へにまゐりました。』

西郷は、ふりかへつて、使者をみました。

『やあ、ごくらうさま、今日は洗濯をして、着物の乾くのを待つてゐるのぢや。』

なるほど、二坪ばかりの庭の隅には、飛白(カスリ)の着物が乾してあります。西郷には、着かへの着物がなかつたのです。

その後、青山へ移りましたが、あいにく、下男の熊吉がるすだつた一日、英國公使のバークスが突然、訪ねてまゐりました。

いくら呼んづも返事がないので、裏手へ廻りますと、庭の隅に破れ帽子をかぶつて、草を取つてゐる大きい人があります。近寄りながら聲をかけてたづねて見ると、それは、西郷その人でした。バークスはすつかりびつくりしてしまひました。

『おゝ、西郷さん。』

『や、いらつしやい。』

西郷は、握手するために、泥だらけの大きい手を、ぬつと差し出して、またバークスを驚かしました。

翁の名聲

翁は征韓論に破れ、鹿兒島に歸つて、しばらくひまのある生活をされて居りましたが、翁の名をしたつて歸つて來た偉い人々や、若き青年の者たちは、その數が非常に多く、このまゝ放つておくと、どんなことを始めるかもしれないので、翁は大變心配されて、桐野利秋、篠原國幹、村田新八などをよんで、色々と相談された結果、城山のふもと（今の縣病院のあるところ）で、もと島津家のうまやのあつた後をかりうけて、明治七年二月に、私學校を立てました。

私學校は、二つに分れて、一つを銃隊學校といつて篠原國幹がその中心となり、もう一つを砲隊學校といつて、村田新八がその中心となりました。學課は戰をする上に大切な學課の他に、支那の論語といふ書物などを敎へ、毎日午前九時から正午までといふきまりになつて居りました。

この私學校が出來ると、まだ學校が開かれない中から、生徒は一ぱいになりました。後には地方の方まで分れて十三ヶ所も分校が出來ました。私學校には別に校長先生は居りませんでしたけれども、實際は西郷が校長先生と同じでありました。

翁は學校が出來ると自分から學校へ行き、二つ校訓といつたやうなものを書いて、之を講堂にかゝげました。

第一、道同ジク義協フヲ以テ暗ニ集合ス、乃チ益々其ノ理ヲ研究シ、道義ニ於テハ、一身モ顧ミズ必ズ踐行スベシ。

第二、王ヲ尊ビ、民ヲアハレムハ、學問ノ本旨タリ。乃チ此ノ天理ヲ究メ、人民ノ義務ニ際シテハ、一向難ニ當リ、必ズ一道ノ義ヲ立ツベシ。

またこの私學校からは、毎年若くて見こみのある人を見立てゝ、外國へ勉強をさせにやりました。明治九年までに五人も外國へつかはしたといふことであります。

この他に吉野に今の修錬道場のやうなところをつくり、農業をさして、物をつくり出すことにつとめました。

翁は自分から、こやしをけを馬にのせ、笠をかぶり、きやはんをはいて、毎日吉野村へ行つて、日が暮れるまで、生徒と一しょになつて、耕作につとめました。

その偉大な人格と、高い品性は、しらずしらずの間に子弟を感化しました。

西南の戰爭が一たび始るや、かねてより翁の德をしたひ、人物を仰いでゐた若き人々は、ぞくぞくとして翁の下に集り、直に一萬以上となりました。いづれも、たゞひたすらに、翁を思ふ念にかたまり、命をさゝげることをこの上もない喜としてゐる者ばかりでありました。

大久保甲東先生

少年時代

大久保利通は、今から約百年ばかり前我が加治屋町に生れました。

小さい時は市藏と云つて、なか〳〵きかぬ氣の少年でありました。

市藏の家から少し離れて、三ッ年上の西鄕隆盛が住んでゐました。隆盛は其の頃吉之助と云つて大さう体の大きい、目のくる〳〵した少年でありました。利通は此の吉之助が大好きで、二人はよく甲突川に出て遊んでゐました。

今日も八月の半ばとて、お日様はぢり〳〵と照りつけます。川岸にある利通の家には、甲突川でさわいでゐる少年達の聲が、手にとるやうに聞えて來ます。利通はもうたまりません。突然庭にとび下りるとそのまゝ吉之助の家へと走つて行きました。門の外から『吉之助さん、吉之助さん』と大聲で呼びました。

吉之助が出てみると、利通はもうはだかになつて、につこり笑つて立つてゐます。川に行かうと言ふのであります。それと察した吉之助もにつこりすると早速二人は甲突川の方へ走つて行きました。

二人は他の友達にまじつて水かけをしたり、水の中にもぐつたりして遊びました。しばらくすると砂原へ行つて、盛に角力のけいこであります。突いたり、投げたりして砂だらけになつては又川にとび込んで行きます。

それから約一時間ばかりの後、利通の門の前に吉之助が立つてゐました。さつきとは違ひ、かすりの着物に袴をつけて、刀を二本さしたりゝしい姿であります。さつきの砂だらけの少年とはどうしても思はれません。晝の一時には下加治屋町郷の少年達は伊地知正治の家に集るやうになつてゐました隆盛は利通と一緒に行くため、さそひに來たのであります。

其の頃は今のやうなりつぱな學校はありません。それで其の頃の少年達は、順番に各々の家に集つて遊んだり、本を讀んだり、又示現流や柔道や槍のけいこ等をするのでありました。

吉之助と利通は連れ立つて、當番の伊地知の家に出かけるのでありました。

伊地知の家ではさつきから、もう大分集つて今盛んに『大名かるた』の最中でありました。其の中に小さい大山巖や西郷從道の顔も見えます。二人が行くとみんな靜かに默つてしまひました。

それから伊地知の庭では少年達が兩方に分れて、勇ましい『大將ふせぎ』が始りました。上になり下になりもみ合ひながら、それは〳〵大へんなあばれ方であります。頭をなぐられてこぶの出る少年もゐます。背中をふまれて地面にはひながら、龜の子のやうに手足を動かす少年もゐます。中には腕がぬけんばかりにひかれながら、それでも自分の場所を離れず大將を守る勇ましい少年もゐます。中でも利通のあばれ方は人一ばいでありました。

やがて『大將ふせぎ』が終ると一休しました。今度はみんな家の中に入りました。今まであんなに元氣よくさわいでゐた少年達は、今度はまるで啞のやうに靜かに仲良く勉强を始めてをります。あんなにお互になぐり合つた少年達とは思はれません。やつと八つばかりになつた從道や巖まで默つて勉强してゐます。其の落ち付いた眼はほんとにきれいにすみ切つてゐます。時々吉之助や利通が親切に年下の者を敎へる事もありました。

かうして夕方近くまで熱心に勉强した少年達は、やがて三人、四人づゝ並んで歸つて行きました。吉之助と利通も明日の當番家の事を話しながら歸つて行きました。

こんなにしてこの頃の少年達は、元氣よく遊び又靜かに熱心に勉强してゐました。

角力や『大將ふせぎ』などの勇ましい遊びには、命がけで決して負けてはゐません。大人もびつくりする程頑張りました。此の少年達が今度は勉强となると、一言の無駄話をする者もありません。みんな勉强に命がけになるのであります。中でも利通は人一倍のあばれ者でありました。が又勉强となるや何時も少年達の手本になる程眞劍でした。少年達の胸には何時も又どんな所でも『天皇陛下の御役に立つ武士に』といふ構が出來てゐました。それでなす事が何でも眞劍でどんなに小さな事で

も眞心をこめてしたのであります。

青年時代

利通が二十才の時、父の次右ェ門は、南方の孤島鬼界島へ流罪の身となりました。父次右ェ門は學問があり、しかも勇氣のある大さう忠義の志の厚い立派な武士でありました。この次右ェ門が鬼界島へ流罪になるやうになつたのは、有名な島津家の『高崎くづれ』に關係したからでありました。

勿論忠義の志の厚い父は、正義派に與した同志の一人でありましたが、殘念にも反對派の爲におとし入れられてしまつたのであります。利通はその頃藩の記錄所の書役でありましたが、父の流罪と同時にその役目をやめさせられその上一家の人々は、自由に外出も出來ない事になつてしまひました。

父の不幸、一家の悲境、利通の悲しみと心配は一通りではありません。

幾日か續いて、朝の中利通の姿が見えなくなりました。まだ暗い中に起きて、裏の井戸で水をかぶると何處かへ出かけて行きました。

『何處へ行くのかしら』

家の者はいくらか不審に思ひましたが、別につき止めようともしないでゐると、却つて怪しんだのは大久保家へ出入する商人でありました。

ある朝そつと後をつけて行きましたが、利通はそんなことは少しも氣づきません。いつものやうに足を早めてまだ門をしめ戸を下して眠つてゐる屋敷町をぬけ、朝露にしつとりとぬれてゐる草をふみしめ、そしてやつて來たのは島津中興の英主貴久公を祀る大中神社（今の松原神社）でありました。

太い松の幾株かがこんもりと繁つてしんと靜り返つてゐる朝の境内は、一入の神々しさであります。利通はその社前へ額いて、一心不亂に祈念をこらしてをります。ふと面白半分に後をつけて來たその男は何とも言はれぬ感じにうたれてしばらくはぼんやりとそこへ立ちつくしました。

その男の口から此の事が家族にも世間にも傳へられましたが、父や家族を案じその安泰を願ふ利通の優しい心には、誰も皆泣かされました。

いよ〳〵父が流される日幼い妹達は、

『お父さまが』とわつとばかりにそこへ泣き倒れました。

『これ何を泣く、お前達が泣くからお母様もお泣きになる。涙にぬれた顏をお見せしてはお父様へすまぬ。……これ女でも武士の子ではないか。』利通は聲を勵まして妹達を戒しめました。

『あつ船が出る。』

見送りの一同は、じつと船を見つめました。

『お父さま！。』

妹達は涙にむせびながら叫びました。

『これつっ。』

利通は靜かに制して妹達を左右に抱き寄せました。

鏡のやうな錦江灣の水の上をゆら〳〵と波を打たせて船はだん〳〵と岸を離れて行きます。この時俄に張りつめてゐた氣がゆるんで、涙が糸のやうにほゝを傳はりましたが、利通はそれを拭ひもせず、沖小島のあなたへ消えて行く父の船を、何時までも何時までも見送るのでありました。

父が流罪になつてからの大久保家はいよいよ貧乏になつて行きました。然し利通は決して氣を落すやうな事はありませんでした。

却つてます〳〵元氣を出して一家の生計に心をくだきながらも、一心に勉學修養を怠りませんでしたので、いよ〳〵意志は錬られ膽力はすはり、剛健な氣象は養はれて行きました。

利通は謹愼の身でありますからなるべく外出もせず讀書や寫字に一日を暮らすのでありますが、時々は親しい友達が集つて催す近思錄や傳習錄の研究の會合には出席しました。

又無二の友西郷と度々無參和尙のもとへ通つてその敎を受けました。無參和尙は勤王の心の厚い立派な坊さんでありました。

一家の生計に心を碎きながらも、一心に勉學修業を怠らなかつたのは、さすが將來大成する人だけ

あつて違つたものであります。

かうした中にあつても雨の夕風の朝思ひ出されるのは、遠い鬼界島へ流されてゐる父のことであります。

形ばかりの小屋の中で、荒い潮風にさいなまれながらも、愼ましくしてゐるやせ衰へた父の姿が、利通の頭に幻のやうに浮んで來ます。

『父上ー定めしおつらいことでありませうが、どうぞお忍び下さい。近い中にきつと無實の罪の晴れる時節が參ります。母上のことも妹達のことも、決して御案じ下さいますな。この私が引受けて居ります。たゞ恐ろしい島のお暮しに、父上がお病ひにならねば……とそればかりが苦勞でございます。どうぞお体をお大切に……』

朝に夕に我が家の佛前にひざまづいて一心に念ずるほか、あの大中神社へも一日も怠らず詣でて、その御加護をひたすらに願ふのでありました。

そして利通に一日千秋の思ひで待たれるのは年一回の島への出船であります。母や妹達の心盡しをこめた衣類から食物、それから煙草、筆、紙、墨のやうなものまで何くれとなく整へて書狀と共に、遠い島の父の許まで送り屆けました。

利通が父の爲に盡しその孝心は、實に涙ぐましいものでありますが、母の爲にも女も及ばない程の

心盡しをしてをります。

母のふく子は、父が遠島になつてからは、どつと病の床についてしまひました。妹達もをりましたが体の具合が惡くなると、それをさすつたりもんだりするのは何時も利通で、又それがいかにもまめ〳〵しく上手なので病人は直に靜つてしまひました。

利通はこのやうに誠に孝心の厚い人で

古語に『忠臣ハ孝子ノ門ニ出ヅ』とありますが全く此の言の人でありました。

利通は又大さう友情の厚い人でありました。殊に西郷とは親しい竹馬の友であり、又互に生死を誓つた友でありました。蔭になり日向になりどんなに助け合ひ激勵し合つたことでせう。

西郷が僧月照と共に錦江灣に入水した時、月照はとう〳〵死にましたが西郷は生きかへりました。西郷は自分だけ助つた事を殘念がり家人の隙を見て自殺しやうとさへしました。利通は大層心配して

『月照が亡くなつて御身だけが生き殘つたのは、決して偶然ではない。これは天が御身になほ果すべき使命を與へてゐるからである。どうか自重してなほ國家の爲に働いて呉れ』

と切に勵ますので、西郷もとう〳〵自殺を思ひ止りました。そして菊池源吾と名を改めて遠い大島へ流罪になつたのでありました。

安政五年から文久二年まで三ヶ年の島の生活―それは實にものういものでありました。さうして懷しい故郷を想ひ又天下の大事を他にして、徒らに荒い潮風に吹かれてゐるはかなさを考へると、胸をかきむしられるやうな悶を覺えるのでありました。その西郷に對して親しい友の利通は、どんなに同情の涙をそゝいだ事でしよう。

利通は便船のある毎に、京都や諸藩の形勢藩の内情等を詳しく報告したり、衣類や日用品を細々と揃へて送つたりしました。當時の利通の日記はその過半が西郷へ送つた手紙の寫しであつたさうです。

それから西郷の家族を度々訪ねて慰め、なほその家族の窮狀がそれとなく久光公の耳へ入るやうに有力な人々を動かしましたので、特に二十五兩といふお救ひの金子がさがりました。その上に西郷召還の議を熱心に說いたのであります。何といふ麗しい利通の友情でありませう。

とう〳〵その志がとほりまして文久二年二月十二日、滿三ヶ年振で迎ひの船に乘せられて、西郷は懷しい鹿兒島へ歸る事が出來たのであります。

又後文久二年に西郷は藩主久光公の怒りにふれた事がありました。利通は此の時もいろ〳〵西郷の爲に辯護の勞をとりましたが、いつかな聞かれません。

『今度こそ死刑か切腹か、到底死は免れない』利通は太い吐息を洩らしてゐましたが兵庫の海岸人

なきところに大西郷をつれ出して、やがて嚴めしい態度になつて、

『わしは御身を見殺しにすることは出來ぬ。いつそ此處で御互に刺違へて死なう』と悲壯な覺悟を述べました。西郷の胸はもう一杯になつてその大きな双の眼から、はら〳〵と涙があふれ落ちました。

『忝けない。その厚い友情は幾重にも感謝する。然し御身までが一諸に死んでしまふたら誰が我々の志を受繼いで呉れるのだ。たとへわしが死んでも後に御身さへをれば藩論はどうにでも動かせるではないか。わしは君命とあれば潔く罪に服するから御身は後に殘り、一段と勇を揮つて勤王の爲に盡して呉れ。それがわしに對する何よりの友情ではないか、賴む』

頭を垂れてじつと聞いてゐた利通も、この情理を盡した言葉を成程と合点しました。この上は出來るだけ西郷の罪を輕くすることに盡力することゝして、死は思ひ止りあくまでも勤王の爲に働かうと誓ひました。その友を思ふ心の麗はしさは實に涙ぐましいばかりではありませんか。それが不幸にして征韓論で離れてしまひました。國家の大策の上の意見から別れはしましたが、然し個人としては互に昔ながらの懷かしさを覺えてゐたのであります。西郷が鹿兒島に歸つてからは度々使の者をつかはして再び上京させようとしました。然しそれも果されませんでした。

このやうに利通はあくまでも西郷を信じてをりましたので、明治十年の亂の報があつても

『西郷はそんな男ではない』

と言つて本當にしません。然し不幸にも西郷が立つたとの確報が手に入つた時は、

『さうであつたか―』

とはらはらと落涙したさうです。西郷の死は更に利通を悲しませました。利通は

『西郷の心事は天下の人には分るまい。分るのは俺だけだ、俺が西郷の事を書き殘して置かねば後世西郷は誤り傳へられるであらう』と

云つてゐた程で、利通は必らず西郷の清い誠の心を天下の人に知つて貰ひたいのが腹一ぱいでした。此のやうに利通は『友の憂ひに我は泣く』と云ふ血も涙もある男らしい人、麗はしい心の人でありました。

利通や西郷の血を繼ぐ私達は又、どうして自分一人よがりが出來ませう。御國の爲に心を一つにして共に進まなければなりません。

勤皇時代

慶應三年十二月九日、遂に王政復古の大號令は堂々と天下に云ひ渡されました。

この我が國未曾有の大革新は、實に我が薩摩と長州の聯合をもとにして、勤皇諸藩の協力も賴み利

通が岩倉や西郷等と共に計畫斷行したもので、その周到な用意と堂々たる陣立とは幕府を始め諸藩の人々を驚かしました。大革新の前の八日の夜のことでした。村田新八等が利通に

『大革新に對する御決心は？』

と尋ねたら

『大勢は決つた。この上は楠木正成が湊川に於ける覺悟で事に當るつもりぢや』

から答へて平然としてゐましたので、村田等は大いに感激したといふことであります。

やがて慶應は改元されて明治となり、江戸を東京と稱し、之まで京都のみに在らせられた天皇は、いよ〳〵東京に御遷幸になり王政維新の大業は完成されたのでありますが、この間の利通のてがらはほんとに大きいと言はねばなりません。

『一兵も動かさないで、よく江戸城の明渡をすまし、江戸百万の市民を危難から救つたのは西郷の力であるが、江戸を改めて東京とし始めて、王政を布いて帝國の首都としたそのもとを築いたのは實に大久保の力である』

勝海舟はかう評して居ります。

利通等は更に進んで版籍奉還、廢藩置縣等を斷行し、國内の大問題を解決し又歐米を視察し、そのよい所を學んで我が國に取入れ、大いに内政の改革に力を盡しました。

明治六年征韓論は不幸にして西郷と利通の意見があひませんでした。利通は兄弟もたゞならぬ西郷と、廟堂で反對の立場に立つて正面衝突をするといふことは、何としても忍び難いので大さう苦しい思ひをしました。が遂に

『國家の爲に私情を棄て奮起する』ことに決心し、西郷に對應して大激論をたゝかはせ、遂に西郷の意見をおさへました。

この征韓の事件は明治の歴史にとつて誠に殘念な事でありましたが又利通にとつても一生を通じての悲しい出來事でありました。人情としては忍ぶことの出來難いのを忍んで、國家の爲大義に生きた利通でありました。西郷といひ又利通といひ、少しも一身を顧みることなく、たゞひたすらに國家を思ひ公明正大、誠を以て自分の信ずるところに向つて、つき進んだのでありますが、二人の心事は此の上なく尊く思はれます。

征韓の議は西郷が一身一命を投げうつての仕事でありましたが、今少しの所で利通の爲にひつくり返され、東洋經綸の大業も行ふに途なく施すに術なく、千秋の恨をその胸に包んで、故郷鹿兒島に歸らねばなりませんでした。

然し西郷は凡人のやうに決して他を恨みませんでした。まして利通に對しては少しの怒りも持ちません。却つて政治の事は利通がよくやつてくれると安心してまかせたのでありました。そして自分は

田畑を耕し山野を開き、又青年を集めて教育し國家有用の材を養ふ事に努めました。

一方利通は政見を異にした爲に、最も親しい友と離れましたが、自分が廟堂にあつて其の後の威望いよ〳〵加はるにつけても、故山に隱れてゐるその友の心情が思はれます。

『偉才を徒らに埋らせておくのは惜しい。としば〳〵人をやつて再起を促したり、大山巖や吉井友實と計つてその心を解かうと努めました。然しその甲斐もなく遂に明治十年西南戰爭となりました。利通は之を聞くや思ひがけぬ事に驚くと共に、西郷が之に加つたことを深く慨き惜しみ、自分が鹿兒島へ行つて事を未前に防がうと計つたりしましたが、遂に大勢は如何とも出來ませんでした。

曠世の英雄南洲翁が、城山岩崎谷の露と消えたのは明治十年九月の二十四日の朝のことでありました。

『西郷が死んだか！』

沈痛な面持で利通は叫びました。眼を閉づれば甲突川のほとりで遊んだ無心の少年時代、兵庫の海岸で互にさしちがへようとまでした感激の青年時代、そして死生を共にと誓つて劍戟の間に奔走した旺盛な壯年時代……次から次へと走馬燈のやうに頭をかけめぐり、利通の胸には深い悲しみの情がひし〳〵と迫るのでありました。

西郷の變を聞いて悲しみの涙に暮れた木戸はその西郷の死に先立つて、五月二十六日病の爲に不歸

の客となりました。

維新の三傑として崇められた西郷、木戸、大久保の中、遂に二人は逝き唯一人利通のみ後に殘り、威望隆々として一世を壓するの觀がありました。當時廟堂の人々の間には

『大久保を參議及び省の長官より一層重要の地位、右大臣にすゝめそして侍補十人の統轄の任に當り、君德の層進を望み奉らう』

との議があつて、殆んどそれが決定してゐたといふことです。

利通はもとより强ひて榮達を望む心はありませんでしたが、いよ〳〵重きに任じ大いに國家の爲に働かうとの念願に燃えてゐましたが、明治十一年五月十四日東京赤坂紀尾井坂にあつて、四十九才を一期として非業の最後を遂げられし事は、なんとしても殘念な事でありました。

利通が勤皇愛國の志を抱いて國事に奔走してから實に二十余年、その功績は誠に偉大なるものがありました。王政復古はもとより、對支事件と韓國問題、そして佐賀、熊本、萩の亂及び西南戰爭はいづれも利通の全盛時代に起つた重要な出來事で、利通のすぐれた手腕識量によつて見事に處理されましたが、利通の功績はたゞこればかりではありません。內務卿として明治六年の十一月から薨去の十一年五月までに、內治統制の上に力を注ぎ國力の充實に懸命に努力を捧げてゐます。地租の改正をはかり減租の議を主張し、又政府の大改革を行ひ、官廳の組織を簡易にしました。或は殖產興業の指導

奬勵、交通機關の設備、殊に海運の發展については大いに力を注ぎ、海國日本の基を築きました。

ます〳〵盡忠奉國の志に燃えて、國家の大策の實行にとりかゝらうとしてゐた際非命に倒れた事は誠に國家の爲に惜しんでも余りある事でした。

利通の余影

利通は骨組のがつしりした体格で、丈が高くうるしのやうな黑いひげは左右に分れていかめしく、さうして巨きな双つの眼は人を射るやうな光りを放つて、何ともいはれぬ犯し難い威容の持主でありました。

維新前後の名を知られた豪傑連中でも、利通の前へ出ると威嚴にうたれて大抵は頭が上りませんでした。時に友人や外國の公使等が

『今日は一つ大いに困らせてやらう』と意氣込んで室に入りますが、

『何ですか』

かう落ちついた聲で言はれると、俄に氣がくぢけて思つてゐた事の半分も言へずに、さう〳〵に引退つてしまふのが度々だつたさうであります。

そんな風ですから大抵の人は利通の前へ出ると、余計な口は一つもきく事は出來ません、要談が終

ると逃げるやうにさつさと立ち去ります。又利通が室に入つて來る靴音がしますと、伊藤博文はじめ今までの談話も忽ち止んで、水を打つたやうにしんと靜り返つてしまひます。

このやうに利通は落ち付いたいかめしい人でありましたが、然しその反面溫い人間味のある人でした。

利通が非常に親孝行であつたことは、父が配流の憂目を見た時の、心盡しの數々でよくわかることであります。母や叔母妹達をも大切にしました。

利通には三人の妹がありましたが、利通はこの妹達を、小さい時から可愛がつてよく面倒を見ました。

『これからは女でも文字が讀めなければいけない』

かう言つて手を取つて手習をさせ、筆や紙は自分が買つて來ては與へました。

又鹿兒島に歸つた時は勿論、折々妹達や親類知人等へ品物を贈りました。それが又まことに行屆いたもので、老人には老人らしいもの、女には又女らしいもので、それ〳〵氣に入るやうな物が入れてあつたさうであります。又子供達にはやさしい父親で夕方馬車の音がすると、子供達はもう大喜びでどや〳〵と玄關へ出迎へ、左右前後からつきまとつて部屋へ入ります。さうして椅子へ腰を下すや否やよつてたかつて靴を脱がせるのですが利通はわざと力を入れて取れないやうにします。すると子供

の方では一生けんめい、眞赤になつて引張る、そこをひよいと力を抜くので、どんと後へ轉げます。利通の笑顔　子供達の笑ひ聲　何といふ美しい情景でありませう。利通は又敬神崇祖の念あつく、小さい時からよく大中神社や天滿宮、祖先のお墓、齊彬公の福昌寺に參詣を怠りませんでした。石谷の楠公神社は利通が二十三四才の頃、楠公の精忠を慕つて、同じ志の友達と計つて造營したものであります。

利通はごつ〳〵した威張つた樣子はなく、勿腰も極めて優しくさうして禮儀が頗る正しいのでありました。お側役となつて毎日殿樣の御前へ出るやうになつてからは、必らず風呂へ入つて身を清めてから登城しました。これが習慣になつて後には、毎朝風呂へ入るやうになつたさうであります。

身支度は實に整つたもので、朝起きると髮には櫛を入れてきれいにし、お客樣にはたとへ目下のものでもきちんと洋服を着るとか、袴を着けなければ會ひませんでした。部下のものでも決して呼捨てにせず。

『〇〇さん』

と言ひ、こちらで挨拶すると丁寧におじぎを返し、中座をしたりする時には目下にも

『一寸失禮します』

と會釋されます。さうして客が歸る場合にはていねいに玄關へ出て送るのでありました。

一生を忠誠以て大君に仕へ奉つた利通、自然に人をおさへつけるやうな嚴かな重々しい利通の反面にこのやうな豐かな人間味がありました。之を知る時私共はいよ〳〵利通に對して尊敬の念が深まつて來るのであります。

今や大東亞戰爭の眞只中にあり一億國民心を一つにして、それ〳〵自分達の仕事にはげまねばならない時であります。私共はこの『生ける驗ある大御代』にしかも此のやうな大先輩の血を繼ぐ傳統の少年少女として生れたのであります。日夜修養につとめ以て大君の醜の御楯として完きを期さねばなりません。

東郷元帥

高陛號げきちん

日清兩國のただならぬ形勢せまつた明治二十七年七月二十三日の朝でありました。空には一群の雲もなくからりと晴れた佐世保軍港に命令一下直ちに出動の準備でたいきしてゐた軍艦は、このとき第一ゆうげき隊の浪速、吉野、秋津洲を先頭に順次出港しました。

すると港外まで出たとき、高砂丸に乘つて途中まで見送つて來た樺山軍令部長の命令で、

『帝國海軍の名譽をあげよ』

といふ勇ましい信號が高砂丸のマスト高くかかげられました。これを見た各艦の將兵は意氣まさに天をつき、清國艦隊をのむ氣勢でありました。

第一遊擊隊として出動する東鄕浪速艦長は乘員全部を甲板に集め、重々しく、

『唯今軍令部長より帝國海軍の名譽をあげよとのお言葉があつた。本官は、諸子とともに全力を振るつて帝國海軍軍人の本分をつくさうと思ふ。』

と訓示しました。

艦橋下に集まつた兵員一同は、東鄕艦長の心からあふれるこの至誠の言葉にたいして、胸中深く決心を示し、かたくその至誠をちかつて各自の任務につきました。

二十五日の朝には早くも朝鮮近海に達しました。この日天氣快晴、海面にはあはい霧がこめてゐました。ふと見ると豐島の方面より二すじの黑煙が我が方に向つて近づいてくるので、速力を增して追つて見ると、これは敵艦濟遠と廣乙であることがわかりました。

『戰鬪準備』。

たちまちにして彼我の火ぶたは切られました。しかもわが浪速をはじめ三艦から打出す砲彈を浴びた敵艦は、あわてうろたへて、遂に陸岸の方へ逃げ去るので、浪速は逃げる濟遠目がけて追げきをはじ

めました。

このとき浪速は、全速力で追げきしてゐたが、ふと先方を見ると英國の國旗をかゝげた船がすゝんで來るので、東鄕艦長は、すぐに双眼鏡をとつて、じつとみつめました。甲板に支那兵らしい姿が右往左往して、鐵砲や劍を振りあげ、さわゐでゐるのが見えました。

たちまち浪速の舷門から、二發の空砲がとどろきわたりました。『直に止まれ』。つゞいて浪速のマストには、萬國信號旗がひらひらとあがりました。

『錨をおろせ』。

錨を投げおろす白い水しぶきが英國船の船首にはねあがりました。かうしておいて東鄕艦長はなほも濟遠を追げきしようとしてゐると、英國汽船から信號で、『前進してもよろしいか』。といつてきました。『動くな』。と浪速は信號をし、濟遠の追げきを吉野にまかせて、海面に止まつてゐる英國船のかたわらへ近づきました。時に明治二十七年七月二十五日午前十時半頃でありました。

東鄕艦長は分隊長人見大尉に英國船の取りしらべを命じました。ボートがおろされました。人見大尉が、支那兵のわいわい叫んでゐる英船に乘りこんで取りしらべたところ、船長は英國人グラシ、ワーシイといふ者で支那兵を千百人と大砲十四門とを輸送する任務を清國から命ぜられ、これから朝鮮へ向ふ途中であるといふ。大尉は、

『わが艦は本船を敵船とみなして捕へる、我が艦についてくるか』。
と船長にいひました。英國人船長は、高陞號は英國船であり、まだ日本と支那との間には宣戰は布告されてゐないから、公海上で取りしらべたり、捕はれたりする理由はないといひました。
大尉はするどい口調で
『我が艦の命令に從ひますか。イエスかノウか、それだけ答へて下さい』。
英國船長は、しばらく考へてから、
『イエス。私は貴艦の命令に從ひます』。
大尉は支那兵の立ちさわぐ甲板をおりて浪速へ歸り、東郷艦長にそのことをほうこくしました。東郷艦長はすぐに信號をかゝげて、
『くさりをまき、錨をあげよ。わが艦に從へ』。
と命令しました。
英國船は、命令に從つて錨をあげました。すると、甲板に立つてこれを見てゐた支那の將校は船長につめよりました。
『船長　われわれは引き歸すのであるか。それとも朝鮮に向ふのであるか』。
『いや日本の軍艦がついてこいと命じてゐます』。

『なに、日本の軍艦がついてこいと命じたと！無禮千萬！』
支那將校は劍を拔いて、
『直ちに引つ返せ。もし命令に從はないなら、さして殺してしまふ』。
とひしめいてゐます。
甲板に群つてゐた支那兵も、一せいにさわぎ立つて青龍刀を拔いたり、鐵砲を船長の胸へ突きつけたりして、口々に引つ返せと叫び、もし日本の軍艦に從ぶやうなら、生命はないぞとおどかしました。
『しかし、それはむちやです。命令に從はないと日本の軍艦は一發の大砲で、この船を沈めてしまひます』。
『そんなばかなことが　われわれには千人の兵隊と、十四門の大砲があるではいなか。戰へば必ず勝つ』。
支那將校と兵士は、青龍刀を振つたり、鐵砲でうつまねをしだりしました。船長は仕方なく浪速に、
『相談したきことあり。至急ボートを送られたし』。
と信號しました。
東郷艦長は雙眼鏡で英國汽船の甲板上で、支那兵が、青龍刀を振り廻してさわいでゐるのをながめてゐました。

そこで人見大尉がボートに乗つて高陞號に出かけるとき、

『清兵が、どうしても命令に從はないやうな場合は、船長と船員だけを希望によつて、ボートに乗せてきてもよい』。

と言ひふくめました。

人見大尉の一行が、英船につくと、ウォルスエー船長は、すぐに迎へて、命令のまゝに從ふとしたが、清國の將校たちは、船長を取りかこみながらおどかすやうな態度で

『清國で雇つてある御用船である以上、われわれの命令に從ふべきぢやないか。もし船長はじめ日本軍の命令に從ふならば、軍規により君等を死刑にするぞ』。

と、にらみつけるので、船長はおそれおのゝきながら、どうしていゝか分らないやうな樣子でありました。人見大尉は、このたゞならぬ形勢を見て、すぐに引つ返し、

『とてもだめです。支那兵は引つ返すことを希望して、船長を銃殺するとおどしてゐます』。

今はぐづぐづしてゐる場合ではない。こんなことに手間どつてゐる間に、敵の軍艦が現れるかも知れぬ。

『直ちに船員は船を離れよ』。

といふ信號が、浪速のマストにひるがへりました。

『ボートを送られたし。』と、高陞號は再び信號しました。東郷艦長もボートを送ることは何でもないが、それがため、支那兵は何をするかわからない。今は、

『ボート送り難し。直ちに船を去れ』

重ねてわが方の信號があがりました。

『船を去ることを許されぬ』。

高陞號船長は最後の返事を送りました。その時にはすでに、浪速のマスト高く赤旗の危險信號が高くかかげてあるのに清國の將兵には更に反省の樣子も見えなかつた。

東郷艦長は時計を見ました。すでに二時間半たつてゐたので、支那兵は甲板に大砲を引きあげ、小銃を浪速に向けてゐました。

雙眼鏡を手にした東郷艦長の顏には、餘りに見るにしのびないことばかりしてゐるので、はげしい怒りがみなぎつてきました。

このまゝ逃がしてやるべきか、いや、いや、日本兵を鐵砲でうたうとやつてきた、千百人の敵兵、それにたくさんの砲彈と大砲……彼らを歸すことは、千百人の日本兵を殺す以上の手落だ。しかし相手は英國の船である。もし、この船をげき沈して英國を怒らせたら？英國が支那側へついて、日本に宣戰を布告したら　宣戰を布告しないまでも、これを種にして英國政府が、日本へ難題を持ちかけた

ら？英國は世界第一の大國である。たうてい今、日本は、英國と戰ふことはできない。……それならば、このまゝに逃がすべきであるか。東郷艦長は、國際公法のことを考へました。なるほど宣戰はまだ布告されてゐない。しかし、戰はすでにはじまつてゐる。英國は中立國である。しからば、互に戰爭してゐる國のどちらかを、特に益すやうな行ひはすべきでない。英國船が支那兵を乘せたのは、英國が惡いのである。いかに强國の英國なればとて、それを默つて見過してゐてよいものか、もし、これを默つて許したとしたとすると、英國ばかりでなく、他のヨーロッパの諸國も、又アメリカまでも日本をみくびつて、勝手な眞似をするだらう。日本は弱い、あれは泣寢入だ、何をやつてもかまはないんだ。

東郷艦長の兩眼ははりさけんばかりにらんらんとかがやきました。唇は、一文字に深く兩頬の中にくひこんでゐました。

軍人の本分は？

敵兵の殲滅（センメツ）である！

敵兵を撃滅（ゲキメツ）して　天皇陛下の大御心を安んじ奉ることである。それ以外にない。しからば、道は一つあるのみ。

撃沈、撃沈の二字であります。

もし英國が無理難題をいふならば、よろしい、東郷平八郎の一命をくれてやらう

東郷艦長は、きびしい恐ろしい顏をして、つと傍を向きました。さうして堅く彫りこんだやうに結んだ唇を開いて、低い鋭い聲で、一言、

『撃沈せよ』。と命じました

命令は下りました。浪速のマスト高く、危險を知らせる赤旗信號がひらめきあがりました。

『撃方始め』　の號令は艦内にひびきわたりました。砲門が一齊に開かれると、同時に、水雷發射管から放たれた一發の魚雷は、青海原に白い一筋の波をけたてゝ高陞號に突進しました。千百人の支那兵は海に飛びこむもの、小銃を浪速目がけてうつ者、大こんらんをなしたが、浪速からの巨彈は一發々々と命中し、午後一時十五分、高陞號は、船首を高くあげると見る間に、忽ちさかしまに突つ立つて、海中深く袂を沒し去りました。高陞號が浪速の眼に止つてから、この間に三時間でありました海中に飛びこんだ高陞號の英國人船長と船員は、全部浪速のボートに救助されました。

この報告が内地に達すると、時の内閣總理大臣伊藤博文をはじめ、國内の人々は非常に驚き、

『東郷艦長のやつた事は餘りに無暴だ。英國が怒つたらどうするか。千人や二千人の支那兵と引きかへになるか』

といつて卓を叩いて、海軍の責任をなじり、浪速艦長の大膽な行ひを非難しました。

先程救助されて、佐世保軍港に送られた、ウォルスエー船長はじめ、船員たちの取調べによつても支那兵のおどかしや、日本軍に十分抵抗出來るのだと意氣まいた、將校達の無暴は明かにされました。だがそんな事は、何んの助けともならないで、世界的に重大問題となりました。

當時の英國のキンバレー伯や、一方では英國東洋艦隊司令長官フリーマントル中將等が、伊東聯合艦隊司令長官をたづねて、きびしい抗議をはじめるなど、事は益々重大化して、世界の强國をほこつてゐる英國を相手に、一戰を交へるやうな事になるのではないかと心配しました。

かうした重大問題の中心人物となつてゐた東郷艦長は、平然としてこのさわぎを眺めてゐるだけの自信があつたのか、伊東司令長官に呼ばれても、英本國をはじめ、フリーマントル中將のきびしい抗議を聞かされたときも、

『誰が何と言つたつて、この東郷のやつた事には、斷じて間違はないつもりです』。

ときつぱり言ひ放ちました。

この堅い信念と、强い自信とは高陞號撃沈の間際に東郷艦長の胸深く刻みつけられた事なので、どんな非難があらうと、彼は最後まで正義の勝利をみとめてゐました。

ところが次第に日がたつに從つて、わが國に抗議を申し込んだ英國が彼國有名の國際法學者ウェストレーキ博士をはじめとして東郷艦長のとつた態度が正當であり立派であると、ほめたゝへるやうになつて來ました。

日本でも、はじめ東郷艦長を非難した人も、あの强國英國を相手とつて、一歩もあとへひかなかつた東郷平八郎の膽力と、その忠節のすさまじさを、ほめたゝへ感謝するやうになりました。

恐れ多くも明治天皇におかせられては……この事件に東郷艦長のとつた果斷のしよちを深く喜ばせ給ひ

『東郷はよくやつた』。

と、おほめの御言葉をもらさせられたと申すことであります。

家庭の東郷元帥

昭和五年五月二十七日は、ちやうど日本海々戰の二十五周年記念日に當り、武將東郷にとつては殊更に思ひ出深い日でありました。しかしこの思ひ出深い日を迎へる頃には、夫人は病床にあつて、元帥と共にその喜びを分つことすら出來ませんでした。

そうした中でも、永い病床生活をつづけてゐた夫人に對する元帥の態度は、武人には珍らしいほど涙ぐましいほどやさしく、思ひやりの深いものがありました。

かうした東郷元帥の家庭での生活をうかがつてみませう。

東郷元帥の長男彪氏の言葉を擧げよう。

『父の偉大さを、子としてどう思ふかといふやうな事をよく聞かれますが、これほど私を困らす問題はありません。子として父の値打をいへよといふことは、非常に無理な話です。私としては、父は非常な好々爺でありました。いいお爺さんだつたといふほかありません。父の一生涯を通じて、子として最も印象の深かつたことは何か、と思ひを回らしてみても、やはり好々爺の一語につきるやうです。私共に對しても、あゝいふことをしろ、こういふことをしろ、かういふことをしてはならんぞ、と別に教訓めいたことをいふでもなく、家庭における父は、平々凡々、何の變りもなく奇い好々爺でありました。

自分の身の周りのことは、一切自分で處理する父でありました。これは永い海上生活の習慣がついてゐるからでしようが、子として敬服し、また眞似られないことでありました。シャツを出すのも、自分で出して着る。お客があつて袴をはくにも、自分で簡笥から出してはいて出る。洗濯したものを女中が居間に置いておくと、父は自分で簞笥にしまつて、自分で出し入れする。ですから父の身の周りの品は、外の者は誰れも知らぬわけで、亡くなつた後の整理で始めて何がどこにあるかがわかるやうな始末でありました。

父の居間の如きも、書類や本や身のまわり品や何かで、まるで物置みたいで埃だらけになつてゐるのですが、誰にもいぢらせなかつた。役所の書類なども副官が持つて來られるのを必らず目を通してそれぞれ入れるところをきめて、分類して、藏まつて置く。そんな風だから部屋の掃除は何年間もたゝ上の埃をそつて拂ひとるだけでありました。

こんことがありました。或時、知人から水菓子を送られましたが、その籠に飾りのリボンがついてゐる。父はハサミを持つて來てリボンを切ると、糸と針をもちだし、押入から座蒲團をひつぱり出して何やら工作してをりました。

『何をなさるんですか？』

と問ふと

『表と裏を間違はぬやうに、目印をつけるんだ。』

といつてをります。

『女中にさせては如何ですか』。

といふと、

『おれは海軍で慣れてゐるから……』

といつて老いた手で桃色のリボンに運針してゐます。

シャツのボタンがちぎれた時でも、自分でボタンをつけるのです。かやうに身の周りのことを淡々

として水のごとく處理して行く父のやり方は、どうも我々には眞似が出來ませんでした』。

これは子が見た父として人間東郷のかざりけない姿であります。なんといふ質素さであらう。そこには勇ましい海の英雄としての姿もなければ、武勇をほこる聖將の姿もない。われわれと同じ人間らしい姿のみがあります。

『どうして東郷のやうな大偉人を、日本國民はあんな家に住まはして置くんだらう。不思議なくらいだ。』

から或外國人の一人が言つたやうに東郷元帥の邸宅は、名將の邸宅とは思はれないほど質素そのものでありました。

大山元帥

少年時代の彌介

七つ八つの彌介に、初めて讀み書きを敎へてくれたのは從兄にあたる二十二三の大西郷だつたのです。當時、大西郷は福昌寺の無參和尙について禪を學んでゐました。

彌介が毎朝書物の風呂敷包みを抱へて、西郷の家へゆくと、夙くに參禪をすませて家に歸つてゐるばかりか、庭は箒目正しく掃かれてゐました。勉强部屋はきちんと片づいてゐて、西郷は机の前にきちんとすわつて、彌介の來るのを待つてゐるのです。

それが毎朝の事なので、幼ない心にも彌介は西郷が偉い人に思はれて、何となく尊敬し、ほんたうの兄さんのやうにしたつてゐるのでした。

十四の時彌介は不幸にも父上を亡くしました。父は累代の親戚西郷家から養子に來た人で、砲術家でしたから、

『彌介どんも、お父さんの跡つぎが出來るやうな勉强方法を考へにゃなりますまい。』

と云つて、注意をし、元氣をつけてくれたのは、何人(だれ)よりも實に大西郷でした。

父上を亡くした後は西郷が唯ひとりのたよりで、丁度西郷の三弟の愼吾（從道）が彌介と同じ頃の年齡だつた所から、まるで双兒の兄弟のやうに仲よくして、西郷に敎を受けたのでした。

立志

江川塾の練兵場は彌介が見渡したところ、『六ヘクタール』はあるやうです。幼ない時から大西郷の吉之助、小西郷の愼吾（從道元帥）、東郷仲五郎（平八郎元帥）、黑木七左衞門（爲楨(ためもと)大將）などと毎日のやうに角力を取つた郷里鹿兒島の甲突川原よりずつと廣いでした。

その霜枯れの草をふんで、あちらに一團こちらに一團、

『肩へ筒』

『立て筒』

と號令勇ましく今迄見たこともない、いき〳〵として目あたらしい西洋式の分隊教練が始まつてゐるのです。みんなで二百人はゐるでせう。

廣つばの隅には、すつかり葉の落ちた銀杏樹の巨木が、箒を倒さに立てた恰好で瑠璃色の空にそびえ、折からの小春日和の日光に白く光る枝々を、小鳥が樂しげに飛びまはつてゐます。

銀杏樹の下には牀几を据ゑ、それに腰を卸して、じつと鋭い眼で教練の様子を見つめてゐる一人の偉らさうな人がゐます。黑塗圓錐形の小陣笠、黑の筒袖羽織に同じく黑の裁付を着、腰には只一刀だけを差し、片手にゲウエル銃を杖のやうにして突いてゐます。近づいて見ると、白髮の老人です。面長な顏と　引き締まつた口もとに、どことなく並の人とは違つた人、この人こそ、江川塾の創立者江川太郎左衞門の後をついで天下の秀才を教へ導てゐる秋帆先生高島四郎太夫でした。

秋帆先生はわが國西洋流兵法の元祖として歷史に永く傳はる大先生であります。

休憩時間になると、高島秋帆は銀杏樹の木蔭へ今日入塾したばかりの彌介を呼んで話しかけました。

『貴殿はわが國傳來の武道は皆御修業されたでせうな。刀のお流儀は。』

『示現流です。』

『おゝ、あれは薩摩獨特のもの。他には。』

『弓槍砲馬の諸術一通りは修めましたが、中で少し誇れるのは槍でございます。これは鏡智流の免許皆傳を受けました。』

實際、彌介は、槍には充分な自信があつたのです。（それにしても面白いのは、明治陸軍の兩、長老山縣、大山の兩元帥が揃ひも揃つて槍の名人だつた事で、山縣元帥は寶藏院流の達人でした）

『それは〳〵誠に結構です。まことに頼もしいです。西洋流の戰の仕方はこの老人が知つてゐるだけは教へますから、それを日本のものとしてつかひこなす――そこに目安を置いて、勉强されたらよいでせう。』

低いが力のこもつた聲で言葉やさしく教へる秋帆の言葉は彌介の胸の奥までひびきました。

『はい』と力强く答へる彌介のほゝは赤らみ眼は輝き將來への決心と意氣にしつかりとこぶしをにぎりしめてゐました。

やがて彌介は秋帆に教はつたとほり、西洋流の戰の仕方を日本式に考へなほし、西洋の大砲を研究して彌介砲と呼ばれた大砲を發明したりします。

二人の話がいよ〳〵薩英戰爭のことになると、

『さう〳〵、あの時は大變でしたらう。貴殿も戰に出られたのですか。』

『戰に行つたどころではありません。』

と彌介は得意になつてその時の様子を話し出しました。

去年（文久二年）の秋、生麥で、久光公のお供先を横切つた無禮の英人を斬り殺したのが因となつて、丁度一ヶ年目の今年七月、七隻の英國支那艦隊が鹿兒島を攻めに來ました。

薩摩男兒の意氣敵を呑み、七十餘人の決死隊が西瓜賣りにばけて、英艦に近づいたのです。かうして敵中に斬りこんで、素手で敵艦をぶんどらうとのはかりごとだつたのです。彌介もこの決死隊の一員でしたが、英艦も警戒して、西瓜も買つてくれなければ、艦上にも上げてくれませぬ。

そこで薩軍は更めて、天保山、祇園の州に備へてゐた。大砲をどし〳〵撃ちかけました。そこで兩方から激しい大砲の撃合が始まり、英艦は碇を切つて逃げあるひは、淺瀨に坐礁したのもあり、殊に彌介の守つてゐた辨天臺場の二十九拇ポンペン砲は、美事に敵の旗艦を撃ち、艦長のジョスリン大佐と副艦長のウィルモット少佐を即死せしめました。これで英艦は力をおとし敗退したのです。

『あの時、貴殿達薩軍が、眞つ裸に赤褌で雨の中を突進してゐるのを見て、英艦では、日本人は赤いバンドを締めてゐると報告してをりましたな。』

秋帆は横濱發行の英字新聞で讀んだのです。

『支那の阿片戰爭のやうなみぐるしい負け方をせず五分々々以下の勝負をされたのは美事な御手際でした。』

『これは全く先公（齊彬公）が秋帆先生等にお教へをねがひ、西洋式の教練を薩軍の人々にされてゐたお蔭なのでして、西洋嫌ひの老公（久光公）も今度こそはとう〳〵我を折り、私初め五六人の者が、こちらへ御厄介になることになつたのです。』

『さう云へば貴殿より遲れて、五、六人、入塾せられたやうだな。』

この中には後の明治の御代になつて伊藤博文についで二代目の總理大臣となつた黑田清隆などもゐます。

『吾等は陸軍の方を志願したのですが、もつと若い東郷等の組は海軍を志願して行きました。この連中はつい先頃できた兵庫の勝さんの塾に入りました。』

この勝さんは海舟のことで、常事、海軍操練所と云ふのを設け、土佐の坂本龍馬を塾頭にして、諸藩からの手に負へぬ荒れん坊を教育してゐました。この時、薩摩から行つた伊東祐亨、東郷仲五郎はともに元帥になりました。

『この東郷といふのは、私達の相撲仲間ですが、あれが申しますには、彌介さん、わしは海から來る敵は海によつて防ぐ修業をすると云つて、えらい勢で出かけました。先づかうして海陸相並んで

兵備を調へねばならぬと、氣づいたのも、英艦と一戰やつたお蔭です。本當に砲火をくゞり、血潮を流して見ないと、どうも人間といふものは覺悟のきまりにくいものと見えます。』

この日から彌介の猛烈な勉强と發明の苦心がはじまります。

さうして彌介砲と共に彌介は明治維新に大きな働きをするのです。

溫泉での大西郷と彌介

『ほう。これは遠いところを御苦勞だつたなあ。』

と云つて日向の吉田の溫泉に、大西郷は大山彌介を迎へました。

『暑い盛りではあり、あの山道だから、隨分と汗をかいた事だらう。話は後のこととして、先づお湯に案内しよう。』

綠の手すりに白く乾き上つてゐる手拭を取つて、西郷が先に立つので、彌助もその後に隨ひました。

浴室に馴れてゐる西郷がさきに浴衣を脫ぎすてゝ大きい體を湯槽に沈めると、鉛色に透き通つたお湯は、ざあ〜と音を立てゝあふれ出しました。

『ひやあ、此れは此れは。

とやゝ頓狂さうに驚きの聲をあげた彌介は、

『兄さのでつかい身體に入られちや、お湯が空つぽになりさうでごはすなあ。』

『さう云ふ彌介どんも、あんまり細い方ぢやないぢやないか』。

『肥えて、段々、兄さんに似て來ます。』

二人には租父にあたる西郷吉兵衛は、身體が角力取りの九紋龍よりも大きいと云はれた程でした。

今がそれが西郷家と、大山家と二つの家族に分れても、此の從兄弟同志には、爭はれないもので同じ血が流れてゐることは、かうして裸體になつてみると、殊によく分るのでした。

『彌介どん。御邊、傷は、もうよくなつたか。』

『はいすつかり直りました。時々神經がひく〜と引つつるやうな氣のすることはありますが、痛みはちつとも感じません。』

（彌介は會津の若松城を攻めたとき敵彈にあたつて負傷したのです）

『どれ、一寸、見せてみな。』

彌介が湯から出て、ゆで章魚のやうな色をしてゐる右足を投げ出しますと、

『おう、こりやひどい。』

西郷は目をそむけるやうにして云ふのでした。

彌介の足は、壁に熟柿を叩きつけたやうな具合に、彈丸が皮膚を破つて、あり〜と爆破の形を痕

として殘してゐるのです。

『骨は何うもなかつたか。』

『はあ、い丶鹽梅に、骨は外れましたから、片輪にならずに濟みました。』

『よかつた、よかつた。さうして命拾ひをしたんだから、これからは一層、世のために働かんにやならんなあ。』

『その覺悟でをります。鳥羽、伏見の戰の前に、愼吾（從道）も彌介も怪我せずに歸るやうなことがあつたら、勘當ぢやと申し渡されましたが……』

『へ丶俺どんがそんな事を云つたか。』

『確かに仰有りました。これだけの傷痕がありや、兄さからの勘當だけはのがれますなあ。』

『あはゝゝ。』

と二人は布袋樣のやうな腹を波立てて笑ひました。

『愼吾どんも鳥羽伏見で大怪我をしてきたし、いや今度の戰爭には、誰れも彼も、みんなよく働いてくれた。吉次郎は、名譽の戰死をしてくれるしなあ。』

『いや、あの兄さは、全く惜しいことをなされましたなあ。』

日清戰爭と大山大將

（彌介は二度目にフランスに行つた時名を大山巖と改めました）

日本軍が全力をあげて旅順攻擊にかゝてゐる時のことです。

旅順の近くにある二龍山と鷄冠山を攻め陷すことが出來ません。敵の方から擊ち出す大砲はどん〳〵味方の近く落ちるのに、味方には敵陣までとどく大きな大砲がないのです。軍司令部ではどうなることかと氣が氣ではない。

丁度その時です。金州城から一通の電報が屆きました。

『敵將宋慶、五六千の兵を以て金州攻擊に來る。敵軍は既に金州西門百米の距離に迫れり。至急援兵をたのむ。』

藤井茂太參謀はびつくりして蒼白になりました。金州にはほんの少しの日本軍しか居ないのです。だから今敵が攻めて來て、金州城が奪還されゝば、敵は必ず、勢に乘つて我が軍の後から攻め寄せるでせう。さうなれば前からの敵と挾み打ちになるのです。

而も敵の指揮官宋慶は、年はもう七十の老人ですが、陸に宋慶、海に丁汝昌と云つて、當時兩々相並んで世界に聞えてゐる名將です

藤井參謀は大山軍司令官の室をのぞいたが姿が見えない。外へ出て見ると、そこで犬をあやしてゐ

ます。

關帝廟の丁度前のところで敵の下士が血まみれになつて倒れてゐます。犬はその主人のそばを離れず吠えつづけてゐるのです。

戰場でフランス士官の愛犬が、主人の死屍の傍を去らず、食事にも口をつけず、一週間の後に遂に干ぼしになつて殉死したとの話を普佛戰史で讀んだことのある大山大將は、

『あれと似て支那にも、犬だけは感心なのがゐるな。』

と思つた大將は、もと〳〵犬好きな人でしたから、ビスケットを投げ與へてゐるのでした。

そこへかけつけた藤井參謀が、

『閣下、閣下。電報が參りました。

と云つてそつと差出すと、大將は、『うん。』と云つて手に取つて、みることは見たやうでしたが、何のこともないやうにすぐ、外套のポケットの中にねぢこんで了ひました。そして、

『おい軍醫、軍醫。この支那兵はびく〳〵動いてゐるから未だ息があるらしい。手當をしてみてやりなさい。』

軍醫が犬をおそれて、手を出すのをためらつてゐると、大山大將は、今度はポケットからサンドキッチを取出して、犬にやりました。

さすがに犬も赤い舌をだしてこれはうまさうにたべて、もつと無いかと後を催促するやうに大將を見上げました。

氣が氣でないのは藤井參謀です。この呑氣さうな樣子を眺めては、あの電報のもつ切迫した重大な意味を、充分に理解しておられないのではないかと思はれたので、

『閣下、その電報は……』

『いや分つてゐる。分つてゐる。』

大將はみな迄云はせないがその話を中途で切つてしまつて、今度は外套のポケットに兩腕を突つこんで、そり身になつて空を仰ぎました。

後になつて藤井參謀は、

『あの時大山さんの樣子を見てゐて、あゝ偉大な人だなあとつく〳〵感心しました。あのあぶない場合に迫りながら、心配さうな色は少しも見せず、悠々と犬を相手にしながら、旅順の戰況から考へて、どこの兵を引つこぬいて援けにやつたらいゝかのみきわめをちやんとつけてをられたのだ。』

と何遍も語りました。

間もなく金州へ逆襲して來た敵は追ひ拂はれ、旅順も陷落しました。

十二月の或晩大山大將が、溫突(おんどる)を焚かせながら、靜かに讀書してゐると、近くの將校宿舍から、し

きりに愉快さうな歡聲のあがるのが傳はつてゐます。

『面白さうに……何があるのぢや。』

と云つて尋ねて行つてみると、若い中尉少尉三四人で、軍司令官の不意の訪問に頭をかいてゐましたが、

『はい、正月が近づきましたから、實は百人一首をやつとるのです。』

と中の一人が元氣よく云ひました。

『かるたか。』

『かるたは手に入らないので、みんなで百人一首の替歌をよんでゐるのです。』

『どれ〳〵、一寸見せてくれ。』

大山司令官は、車座の眞中に廣げてある支那の書箋紙を取上げると、その書初めには『百忍一酒』とかいてあります。

『これは』

『はい。この戰地では、あゝ飲みたいなあと百ぺん我慢し、忍耐して、本物の酒には漸く一ぺんありつける割合ですから、それで百忍一酒。……實は今夜は、支那酒を少し手に入れて、いま、やつとるところなのです。』

と怪しげな火鉢に火をおこして、その上に水筒で燗をしてゐるのを指さしました。

大將が次ぎ〳〵によんでゆくと、その百忍一酒には、なか〳〵の名吟があります。

○とどむれど前に出にけり我が兵は
　もはや負けたと敵のいふ迄

○渤海をわたる舟人かぢを絶え
　行衛も知らず逃ぐる敵かな

○北京まで行くののみちは遠けれど
　夜ごとに通ふ夢の浮き橋

『ほう－どれもこれもみな面白うごわすな。』

と云つた大山軍司令官は、自分も筆を取つて一首を書き添へたのでした。

○いにしへの支那の親爺の法螺太鼓
　けふこの頃に破れぬる哉

そして部屋に歸つたと思ふと間もなく從卒にブランディをとゞけさせました。

『これは少し口をつけたが、まだ半分以上殘つてるから、皆さんで召し上つて下さいと、閣下が申されました。』と。

若い將校達は部下を思ふ大將のこのやさしい心に感じ、

『この大將軍のもとに死なう』

と心に固く誓ひました。

日露戰爭と大山元帥

日露戰爭といふ日本歴史はじまつて以來の大國難に當つて、軍の總司令として、初から、明治天皇の御眼鏡に入れさせ給うたのは、大山元帥でした。

只、この際大山元帥に出向かれては困ると思つたものが一人ゐました。それは時の海軍大臣鹿兒島出身の山本權兵衛でした。

『大山さん。あんたのやうな大元勳は、居殘つて私達を御指導下さつた方が、よかではごわはんかなあ。戰地も大切ですが、國内の方も、あんたがゐて初めて解決のつく問題が多うごわすからなあ。』

默つてそれに耳を傾けてゐた元帥は、

『いや』

と、首を振つた。『うちの方は伊藤、山縣、若手では桂や御邊もゐることだから、うまくゆく。ところが戰地の方は、野津、黑木、奥、乃木、兒玉、川村、頭株がみな一世の雄ごわすで、他のもんでは迚もいかんぢやろ。だが俺は、それ等を圓くまとめて、それ〴〵の才略をうまく發揮させる自信があるから、こゝはどうしてもおいどんがゆく。』と。

六月二十日滿洲軍總司令部編成の命が下り、大山元帥は參内して、その司令官に任ぜられると共に左の勅語を賜はりました。

『朕ガ出征ノ諸軍ハ漸次其ノ歩武ヲ進メ今ヤ一層ノ活動ヲ要スル時期ニ達セリ　朕乃チ卿ヲ滿洲軍總司令ニ任シ委スルニ其ノ指麾ヲ以テス　卿ヨク朕カ意ヲ體シ往テ征討ノ事ニ從ヒ途ニ其功ヲ奏セヨ。』

これ程大きい光榮を拜受した者もない代り、又これ程大きな責任を君國に對して感じた者もないでせう。元帥は

『誓つて敵を擊ち攘ひます』

と力强くお答へ申上げ御前を退きました。元帥にはこの時既に大勝利を得られるとの大確信があつたのです。元帥の自信に滿ちあふれた力强い答に明治天皇も大變お喜びになつたと云ふことです。

愈々總司令官として滿洲に出征と決つた時、總參謀長の兒玉大將へ、

『そいでは兒玉さん、戰爭の事は全部あんたに賴んもんでなあ。大本營への責任は總て乃公が負ひますで、戰の事はあんたの思ふ存分にやつて下され。』

と云はれたさうだが、斯う任せた以上作戰のことなどには一切口を出さず、幕僚などが何か總司令官に尋ねて來ることがあつても、

『兒玉さんは何というて居られたかな。あゝ、兒玉さんがえゝと云はれたらそいでよか。』

といつた調子で、一切を兒玉總參謀長に任せきつてゐたので、兒玉將軍もその天才的の智能を充分に發揮することが出來たのです。

奉天大會戰の時です。

二月二十二日未明、鴨綠江軍先づ出動し、東の空が白むと共に、前線陣地には、ドローン、ドローンと砲聲が轟き初めました。

それに眼を醒ました大山元帥が、策戰室に來てみると、兒玉總參謀長以下全部員は連日連夜一睡もせず、眼を眞赤にしたまゝ地圖を睨みつめてゐて、朝になつたことも氣づかず、灯を吹き消すことを忘れてゐました。

『兒玉さん、兒玉さん。

と大山元帥はその肩に手をおいて、

『何だか大筒（大砲）の音がしもんが、今日、戰がごわすか。』

この一言にはさすがに兒玉將軍もあきれて、暫しは元帥の顏を見つめてゐました。

今朝から奉天城總攻擊に取掛ることは、苟くも總司令官に報告しないで置いた筈はない。それをけろりと忘れてゐるのだとしたら大馬鹿か、知つてこんなに呆けてゐるのだつたら、何と云ふ洪量何と云ふ腹の大きさであらう。

兒玉將軍が大山元帥の顏のその頓狂さに、思はずクスリと笑ふと、それは側にゐた福島少將、松川大佐、その他の幕僚にも傳染して、皆クス〳〵と忍び笑ひもらしました。

大山元帥も思はずそれに誘はれて自分でも笑ひ出したが、此れは『アッハッハ』と二十何貫の大皷腹から搖りだした石垣の崩れるやうな豪快な笑でした。それは笑のガソリン、タンクに火が入つたやうなもので、みんな、もう笑を殺してをることが出來ず、とう〳〵一度にどつと吹き出しました。

それ迄の策戰室は連日連夜の過度の緊張に、みんな神經過敏になつて、顏から剃刀でも飛出しさうに焦立つてゐたのに、この爆笑で、急に室內が和やかになつて、みんなの心に一脈のゆとりが出來ました。

戰場で笑が出るやうになつたら、もう勝です。

『あゝ、此の調子なら心配することはない、また屹度、大勝利だ。』

その確信が、兒玉將軍の心の底から湧いて來るのでした。

之に反して敵のクロパトキン將軍はどうだつたでせう。二月の末日迄連中を巡視し、三月一日には奉天に歸つて、奉天停車場の中の立派な家に寢起してゐました。併し開戰以來の敗戰つづきの不名譽を、この一戰に雪ぎたい心が一ぱいで、却て神經衰弱になつてゐました。而もそれが一兵率の心にまでうつり、暗い不元氣な氣分が全軍の上に掩ひ被さつてゐたのでした。

だから一口に云へば奉天戰は、大山元帥の鈍重大量と、クロパトキン將軍の神經衰弱との戰でした。どちらが勝つかは考へただけでわかりますね。

元帥は、日露戰爭の功により、金鵄勳章功一級を賜はり、及公爵にのぼすとの恩命を拜しました。

外遊中の元帥

明治十七年元帥は陸軍卿（大臣）として軍事取調べのために、歐洲諸國へ派遣されることになりました。

一行が伊太利の羅馬へ乘込んだ時のこと、盛大な歡迎會が催されて、主催者側の歡迎のあいさつに對して、大山元帥がお禮のことばを述べることになりました。

通譯者（日本語をイタリー語になほす人）と並んで立上つて大山元帥は、重い唇を開くと、通譯の人に、

『よか賴む』

と云つた。通譯は呆れて大山の顏を見上げたが、童顏を綻ばせてにこ〳〵して居るばかりで後の言葉はない。

『でも閣下、何とか仰しやつて下さらないと……』

『いや、乃公は演說は下手でごわすで……それで日本語で何と言うても、外人は分らんのぢやから、貴公の思ふがまゝに、よか賴む』

主催者側の伊太利人には、何を云つてゐるのか判らないからよいが、陪賓の日本人や隨員達は吹き出しさうな可笑さをこらへて居ります。その苦しさは一方ではなかつたといふことです。

通譯する者は迷惑千萬な話だが、まさか『よか、たのむ』と申しましたとも云はれないので、仕方なしに『伊太利と日本とは、共に島國的な地形であること、火山があり、地震があり、風光明眉である點など實に似通つたところが多く、國民性も勇敢であり大昔から文化の進步してゐる點など、伊太利と日本とは國情が似通つてゐます。その伊太利に來てこのやうに丁寧なもてなしを受けることは大へん有難い』といふやうな意味を、二三十分間述べましたが、これが又非常な名演說だつたさうで、

並居る伊太利の名士達は大へん感動しましたが、それよりも更に彼等が驚いたのは、大山元帥が何か日本語で一言二言いつただけなのに、それを伊太利語になほすと、こんなにも長いものになるものか

『日本語といふものは素晴しいものだ』

と舌を巻いて驚いたといふことです。

それから陸軍部内に暫く『ヨカタノム』といふ流行語が行はれたといふことです。

結び

大山元帥は大西郷とは従兄弟であり、體や顔つきも似てゐたが、やることすべて心までも又大西郷に似かよつてゐました。

腹も大鼓腹で大きかつたが德も太く廣い人で、どんな人がけんくわをしかけても笑ひとばしてけんくわになりませんでした。

又人を信ずる念の強い人で一度信じたらどこまでも信頼し命までもまかせるやうな人でした。體格が大西郷のやうに大きかつたゞけ、動作はのろく馬鹿みたいにぼーつとしてゐるかのやうに見えましたが、頭腦は鋭く緻密で何時も人の考へる先までもちやんと考へて、それを大きい大鼓腹におさめてゐたのです。

それで戰の度に大將に戰功があるのか無いのか分らぬけれども、部下に目ざましい戰功を立てさせることにかけては又とない名人でした。

又戰爭がどんなにあやふい時でも大山の巖々たる如くどつしりとしてゐて、常に御國の爲にとのみ死ぬまで努力した大英雄でした。

元帥と同じ郷土に學ぶ皆さん、昭和の大御代に元帥の心を心とし元帥のあとを繼がねばならぬのは皆さんです。皆さんでなければなりません。

島津賢章院夫人

神様として照國神社におまつりしてある島津齊彬公は、日本國中で一番はやく紡績事業をはじめたりして、外國の進んだことに早く目をつけて色々なえらい仕事をしたほどの殿様でありました。この齊彬公のお母様を賢章院夫人といひます。賢章院はたいへんかしこい御方で、御子供の教育や躾け方にも非常に注意深く信仰もあつく、そしてまことにやさしくしとやかで、すべて女子としてのりつぱな生きたお手本でありました。

夫人は島津家第二十七代の殿様島津齊興公の奥方であります。幼い時の名は彌姫、諡を賢章院殿王

輪惠光大姉といひます。

夫人は寛政三年十二月二十八日に江戸因州藩邸で御生れでありました。ところがどうした事でせう。わづか半年もたゝぬ翌年の四月にお母上はなくなられました。そこで五つになつた時からまゝ母の、轉心院殿にそだてられてゐましたが、八つの時の五月にはまた〳〵父上に死にわかれました。ほんたうにどこまでいたわしい身上だつたことでせう。

けれども夫人はうまれつきたいへんかしこくて、學問を一心に學びました。又歌をよむ事や詩をつくることなども好きで大へんお上手になりました。ことに禮儀を正しくすることやお作法その他女子としてのしなければならない道には一そうはげみ、又ふかく佛さまを御信じになつてゐました。

文化四年十七才の時島津家にお嫁入しました。齊興公には心からつくして同六年九月には江戸の芝にある薩摩のおやしき男の子が御生れになりました。この御方がやがて薩摩の國をよく治めてのち照國神社の神様としてまつられた齊彬公で初めは又三郎忠方といひました。それから翌年には次男の治五郎齊寧がお生れになりました。この方は大きくなつて備前國岡山家の養子となつて齊敏公と名をあらためた方であります。この殿様も備前國をよく治めかしこい方と評判が高いでした。

次に十二年には一人のお娘さんが生れました。この娘を祝姫と云つて後に土佐の國の殿様山内家の奥方となつてなか〳〵りつぱな婦人でありました。あのえらい松平容堂公を養子としていつも注意し

てりつぱにそだてたといふお話が、たくさん殘つて居ます。

賢章院はこの子ども達をみな一様に可愛がつて又兄弟の間もいとむつまじくしてゐました。

夫人がどんなに世にまれな、かしこい方であつたか、どんなに學問が深かつたか薩摩の人達が今もなほその德をたゝへしたふ事によつても知られます。

夫人が島津家に嫁せられる時のことです。薩摩の殿様のところへゆかれるのですから色々とりつぱな調度品がたくさんあることだらうと役人達は考へて居りましたが、お道具の中には本箱がいくつもあつて、その中にはむつかしい左傳や史記や漢書などが、ぎつしり入つて居りましたのでその役人たちは、びつくりしたといふ事であります。それればかりでなくよろひかぶともありましたので役人達は不思議に思つて、

『何故こんな鎧兜まで持つてゐらつしやつたのですか。』

と云ひますと、夫人は

『薩摩●大隅●日向の三つの國を治められる殿様が何かの用事でもしお不在の時は、私が御名代をしなければなりませんから。』

と答へられました。

夫人は薙刀(なぎなた)も大へんお上手でした。夫人の嫁入りされた其の頃の習慣は、大名はもとより、身分の

高い人はたいがい、お子供が生れると、乳母を置いて、それにそだてさせるものでしたが、夫人は大切なお子供を人手にわたして育てると云ふ事は女の務として、してはならぬ事だと云つて大奥の老女や側役等の注言を皆しりぞけて齊彬公には自分で乳をやつてそだてました。そして子供の教育にはすべてみづから細かい所まで注意して育てられました。こんな風でしたので齊彬公も亦よくお母上につかへて孝道をつくされたのであります。齊彬公十三歳の時或日騎馬で川崎大師に參詣しその歸る道に林の中の美しい椿の花を手折つて母上に持歸つたりしましたところが、母上は齊彬公の心の優しさを喜び、

とをき道に遊ぶ身ながらわすれえぬ
孝の一字ぞげにたぐひなき

と詠んで與へられました。

夫人には齊彬公を頭に五人の子供がありました。夫人はやさしいおなさけぶかい性質でありましたが、又子供の躾方はなか〳〵きびしくしてゐました。

長男の齊彬公と次男の齊敏公とは、すべての事に區別をたてゝ居ました。齊彬公は朝起など少々おくれても格別な事もありませんでしたが、齊敏公には、なか〳〵きびしく、しつけてゐました。雪の降る寒い〳〵冬の朝でも顔を洗ふ時お湯を使ふ事はかたくとめてありましたので手のきれるやう

なつめたい水でいつも顔を洗ひました。そこで或おそばつきの者が、不思議に思つてこれをたづねますと、

『一体大名の家は二男三男は、大低他の家のあとつぎをさせる習慣がある。それで二男はいつどんな家の人となるかもわからない。だから平生きびしくしつけておく必要がある、齊彬公は生れながらにして、三州の太守になるのだからお家の之までの仕きたりにまかせておいてもいゝのだ。之はみんな子を思ふまごころからであつて、決してかれこれわけへだてのあるわけではない。』

と夫人ははつきりと御答へでありました。おそばつきの者は、今更ながら夫人のおえらい事に感心しました。こんなでしたから齊彬公も非常にかしこくて、學問にせいを出きれました。本を讀んでゐる途中むつかしくて讀むことが出來ない時は大へん殘念がつて目から、ハラ〳〵と涙をこぼしてゐました。御抱守(だきもり)である長崎良右衛門がそれを見てあまりいぢらしく思つて、夫人に、

『よく讀まれた後はおほめ下さると齊彬公もお喜びになることでございませう。』

と夫人にいひましたが夫人は、

『ゆくゆくは三ヶ國の藩主になる身の上であるから、こんなに勉強するのは、あたり前の事であるからそんなにほめるほどの事でもない。』

と云つてゆるしませんでした。そして幼少である齊彬公を誡めて言ふには

光なき石と見なして心もて
　みがきあぐれば玉となるらむ

との一首の歌でもつてしました。

さすがは後日天下にその名をあげた齊彬公でありますから、この業を拜して深く心に銘じて、すぐ次のやうな歌をよんで、母君に上げました。

古のひじりの道のかしこきを
　ならひて學ぶあしたゆふべに

これは齊彬公が八九歳の頃の事と思はれます。夫人は學問上の事はこのやうに申されましたが公の日常のことについては、すべてに慈悲の心が深い方でした。

そして又折にふれて人の行ふ道を說かれてゐますが『三十六歌仙こほろぎ物語。』といふのをお書きになりました。これは夫人一代の傑作として、和漢の學問と佛教上の信仰とがいつしよになつて夫人の豐なしかもうるほひのある心をうかゞふ事が出來るのでありますが、齊彬公は十四五才の頃、自ら之をうつしてよくよみましたから、母のその言葉によつて深く修養を積まれたからこそ、後にはりつぱな殿樣としてうやまはれるやうになつたのであります。けれども天の神樣は無情にも齊彬公が十六歳の文政七年八月十六日、母上賢章院夫人は三十四歳でこの世を去りましたが、その歸らぬ旅にたつ

際にも齊彬公の將來を思ふあまり

『慈眼返照　回光の日、あやまつて父母の名をけがすなかれ。』

といましめのことばをのこし齊彬公は又母堂との別れを惜んで後に三十三回忌に

有明のかたぶく月ももろともに
　雲かくれぬる君ぞこひしき

といふ和歌をつくつて無き母上の靈前にそなへられました。

古からえらい人のうしろには必ずりつぱなお母さんがあると言はれてゐますがそれは賢章院夫人と齊彬公とによつて果してさうであるといふことを知ることが出來るのであります。

乃木靜子夫人

安政六年も暮近い十一月二十七日の明方、甲突川のほとり、新屋敷の貧しい鹿兒島藩主湯地定之の家では、七人目のかあいらしい女の赤ん坊が生まれました。男の子が三人、女の子が四人、此の子は丁度七番目に當るので、名をお七とつけました。此のお七さんが後の乃木靜子夫人なのです。

湯地家はどんなに貧乏でも、子供の教育だけは、父の定之も母の天伊子も忘れませんでした。三人の

男の子は、慈愛深き母の手で、武士の子らしくきりつと身なりをとゝのへてもらひ、竹刀と書物とを持つて、毎日緊張して藩の稽古所へ通ひました。三人とも、學問も武藝もすぐれてゐて評判が高いでした。母や姉が夜もろく〳〵寢ずに賃仕事をしたり、米搗をしたりするのを見ては、あんかんとしてをられません。稽古所から歸ると袴をぬぎ、母や姉に手傳つて內職の賃仕事にはげみました。

「湯地どんには大勢の子供がおさいぢやつどん、兄弟げんくわ一つなさつとこゆ、見たこつもござんさん。」

家こそ貧しいですけれど、近所の者がみんなうらやむ程仲がよく、志の高い父と、慈愛の深い母とを中心に、一家はいつも春のやうに平和でありました。

お七さんは幸にこれといふ病氣もせず、母上や姉上の心盡しで可愛く育つていきました。六七歳の頃から大ていの事は自分でして、着物の着こなし等もきちんとして、人手を借りることはありませんでした。特に稚兒髷が上手で、『お七さんの稚兒髷。』といふと近所のほめられ物で、きりつとしましまつた顏だちにとてもよく似合つて可愛らしいでした。又裁縫の稽古を始めて、おぼつかない手で針を運び、紅葉の樣な手に行儀作法も敎へられました。時々は臺所へ出て水汲みの手傳ひもし、洗濯もしました。僅か七つか八つで自分の肌着ぐらゐは縫え、自分でお洗濯もきれいに出來ました。又決して食べ物などに好き嫌ひなどをせず、どんな物でも行儀よく食べました。

此の頃までは鹿兒島は、男子に對しては非常に嚴しい武士的敎育が行はれてゐましたが、女子は裁縫と行儀作法と臺所のことが出來れば十分であるといふので、學問をさせるやうな家はあまりありませんでした。お七さんは學問が好きで、兄達の樣に塾へ行つて勉强したくて、父上や母上に再三話しましたけれど、女子には學問の必要は無いといはれて、許されませんでした。よし、それなら、とお七さんは決心しました。兄さん達が塾から歸つて復習するのを窓下に立つたり、襖越しに聞いたりして一心に覺えました。寢床にはいつても、それを忘れないやうに暗誦してみて、兄さん達の留守の間に、そこのところを本と合はせて讀むやうにしました。此の熱心な樣子はとう〳〵父上を動かしました。或日兄の定基（サダモト）さんは父上に向つて

「父上、世の中も段々と進んでまゐりまして、男子は申すまでもありませんが、女子の修養も大切だと存じます。これからは女子にも學問が必要です。お七ももう八歳になりましたから、明日からでも寺子屋へやつたら如何でせう。」

とすゝめて呉れました。父上も、お七さんのかねての樣子をよく知つてゐましたから、早速知り合ひの植木といふ先生が開いていらつしやる寺子屋へ賴んでくれました。學問好きなお七さんは嬉しくてたまりません。たくさんの腕白小僧に交（マジ）つて、雨の降る日も風の日も休まずに通ひました。お七さんの書物を讀む愛らしい聲が朝夕きこえて來ます。小さな手に筆を握つて白紙に染める墨の跡も、日々

その美しさを増して行きました。

「お七さんは、大層學問がおでつきやつよしござしなあ。」

忽ち近所の評判になりました。先生もその進み方の早いのにびつくりなさいました。生まれつきりこうでもあつたのでせうが「負けてはくやしい。」といふので、人一倍勉强もしたのです。腕白盛りの男の子は、たつた一人の女のお七さんに學問の進みが負けさうなのでくやしくてたまらず、惡口を言つたり、口もきかないやうにしてゐました。しかしどんな目にあはされてもお七さんは相手になりません。「好きな學問をするためだ、これ位はなんでもない。」とじつと辛抱しました。

「君子は爭はず。」

お七さんは論語で習つた通りを實行してゐるのです。そしていつも身なりを崩さず、口もとに快活なほゝゑみを浮べてゐました。いぢめれば避け、惡口を言へば耳をふさいで聞かない、それかといつて、先生に告口などするやうなこともありません。終には男の子も張合がなくなつてしまひました。

二三年もたつとお七さんは他の子供とずつと出來が違つてしまつたので、先生は特別に教へなければならなくなりました。白い帶を撫でながら植木先生は、お七さんのために特に女大學を講義してきかせました。凉しい眼元ときちんと結んだ口もとに凛々しさを見せ、膝一つ崩さずにじつと聽いてゐるその樣子は、どんなに植木先生をよろこばせた事でせう。若し先生が用事があつたり病氣のやうな

時にはお七さんが代つて他の生徒に教へたこともありました。此の頃はお七さんの一家は下荒田の方に住んでゐました。毎年秋になると、下荒田と川向ふの村との子供が集つて、今でいふ學藝會、習字の成績の競技會があります。日頃からみんな一生懸命に練習して、選手が選ばれます。その名譽ある選手が集つて書いたものの中から、優勝者が定められるのですが、いつもいつもお七さんが一等で、勝は下荒田にとられます。

「お七さんが出やつとなら、いやぢや。」

相手方ではお七さんが出ては到底勝てないとあきらめて、こんな弱いことさへ言ひ出しました。

お七さんが十二才の時、鹿兒島にも女學校が建てられましたので、これにはいつて勉强しましたがこゝでも成績は一等すぐれてゐました。

「あのお七さんが男ぢやつたら、やがちやいけなえらか人にないやつもんぢやろか。」

お七さんを知る人は皆かう言つてほめたり、惜しがつたりしました。けれどお七さんは決して高ぶることなく、どこまでも女らしい淑やかさを失ひませんでした。それで近所の人々は、何かといふとお七さんを引合に出して、

「そげな事をお七さんがおしやつもんごはすか。聞いておんみやんせ。若しお七さんがおしやつなら許してあげもそ。」

と子供達を戒めました。

明治五年お七さんが十四の時でした。久しく海外に留學してゐた一番上の定基兄さんが歸朝したので、一家は東京へ引移ることになりました。お七さんのお友達はびつくりして

「お七さん、東京なんでな行かんごつおしやつたもんせ。」

「お姉さあ、東京へはおさいぢやらじ、こつち殘つてたもんせ。」

袂にすがつて引止めましたが、しかたがありません。大勢のお友達は町端れまで送つて來て、涙ながらに別れました。

お七さんはその翌年、十五歳の時から、東京の女學校へ通ひました。お七さんが大そうしつかりした人であつた上に、兩親の躾がよく、決して都會の惡風に染む樣な事はなく、いつも

「私は女の中の一番よい女にならぬば。」

と決心して、學校の外にお茶やお花●裁縫●琴、それに繪の稽古もしました。しかしお七さんに一つ困つたことがありました。それは言葉です。

「私は何も東京の皆樣に負けるやうな事はございませんが、たゞ困るのは言葉です。先生のおつしやる事も、お友達の言はれることも私にはよく分りますが、私の申し上げることが十分に先生やお友達に通じないことがあるので、心苦しいと思ひます。」

お七さんは東京の女學校に入學した頃、よくこんなに話してゐました。しかし日が立つにつれ言葉も慣れ、いろ〳〵なお稽古もぐん〳〵上達しました。特に繪の先生は

「お七さんは男のやうなしつかりした筆勢で、見事な繪をおかきになります。私も樂しみでございます。」

としきりにお七さんのことをほめて、將來に望みをかけてゐました。ところがどういふものか、琴だけは大嫌ひのやうでした。半年近くなつても、一度も家で彈いて見る樣子がありません。母は琴が大好きでお七さんが上手になつたらきかせてもらはうと樂しみにしてゐました。稽古から歸つて來たお七さんに尋ねても

「今日は六段を習ひました。」

「今日は黑髮を習ひました。」

と答へるばかりで「それでは復習しておきかせしませう」とは言ひません。たゞうつむいて今にも泣き出しさうな顏をします。或日母上は

「お七や、お母樣は體が弱くて人樣のやうに、花見にもお祭りにも出歩けないので、何一つ樂しみがないから、お前がお琴が上手になつたら聞かせてもらはうと思つて、今日か明日かと樂しみにして待つてゐるのです。」

といひました。母上の此の言葉は、お七さんの胸を強くうちました。

「お許し下さい、お母上様。私はどういふものかお琴が好きになれませんでした。しかし今日からは、きつとお稽古に勵みます。さうして一日も早くお母様に聞いて頂けるやうに努めます。」

お七さんは母の前に手をついて涙を落しました。それから湯地家からは毎日美しい聲と、上手な音色がもれる様になり、お七さんの腕前はめきめきと上達しました。母上は來る人ごとに、嬉しさうに

「お七がお琴を聞かせて呉れますので、私は此の頃樂しみが一つふえました。」

と話しました。

兄上もそれ〳〵出世して、何不自由のない生活が出來るのですが、鹿兒島時代の貧乏のつらさを思ふと、あんかんと暮してゐてはお天道様に申しわけがないと、廣い庭の一部を畠にして、野菜や花を作つてゐましたが、お七さんもそれを手傳つて働くことを樂しみとしてゐました。

かうしてお七さんは、日一日と女子としての修養をつみ、上品で心だてがやさしく、孝行でどこへ出しても恥かしくない娘になりました。

「お七さんは感心によく出來たお方だ。」

「ほんとにあのお方は、好いお子さんですね。」

とか言ふ言葉は誰の口からも聞かれました。お七さんは人にほめられるだけ、それだけ深く身を慎(つつ)み

ました。すべて自分をかへりみて、足らぬと思ふところは補(おぎな)ふやうに氣をつけました。心の持ちよう一つで、どんなにでもよく光る玉に磨き上げられるものと信じて、一生懸命修養しました。

女の中の一番よい女になるために……

乃木大將が或る日、薩摩の人の家に遊びに行かれました。ところが丁度その時、そこの子供が石につまづいて泣きました。するとその母が

「なんといふ樣子です。石に負けてどうしますか。石を打つてかへしなさい。」

と諭(さと)してゐるのを見て、「家庭の教育は主婦にある、主婦は薩摩の氣丈な者に限る、家庭をうまく切り廻して行くのは薩摩の女に限る。自分の妻には薩摩の人をもらひ度い。」と心ひそかに思ひました。

大將が歩兵第一聯隊長の時、その副官をつとめてゐる伊賴地といふ大尉は鹿兒島の人で、しかも鹿兒島にゐる時は、湯地家の隣に住んでゐました。或日大將が伊賴地大尉に

「鹿兒島の人を妻に迎へたい」

と話されたので、大尉は非常に感激して、「さうだ、お七さんなら鹿兒島の娘さんの代表として、どこへだしても恥かしくない。」と考へて、大將にすゝめました。かうしてお七は乃木聯隊長夫人として迎へられることになりました。それは丁度お七さんの二十歳の時でした。そこでお七さんは名を靜子

とかへ、乃木家の人となりました。

靜子夫人は内に居てよく夫に仕へ、暮しむき一切をさばいて、夫を助けると共に夫の母堂壽子(ヒサ)に實母のやうに仕へ、いつも夫からよい教を受けて、美しい立派な夫人になりました。何といはれても「はい／／。」とよくきくし、どんな悲しい辛い事があつても、つつしみの態度を失はず、妻としての道を欠ぐ樣なことはしませんでした。何事も、母上や夫の氣に入る樣にし、不滿を言はれないやうに努めました。

一年目には長男の勝典君、二年おくれて保典君が生まれましたが、母上が

「どんなに寒くても、こたつや火鉢を使ふことはなりません。それから夜は火の用心が惡いから、火の氣を置いてはなりません。」

と言はれる言葉に從つて、乾きの惡い冬は、背中におむつを入れて體のあたゝみでかわかしたり、冷たいおむつはふところであたゝめて、子供にあてがひました。

母堂の病氣の時、靜子夫人の看病振りは、はたの見る目も涙ぐましい程で、二箇月の間帶さへ解かず、その枕邊から離れませんでした。いよ／／臨終の時

「靜子、ありがたう。永い間お世話になりました。お前程の嫁をもつた私は、ほんとうに幸福でした。どんなにお禮を言つてよいかわかりません。」

と、靜子夫人の手を取つて感謝しつゝ、眠るやうに息を引取りました。

日一日と文化はすゝみ、外國との交通もしげくなりました。「世がこんなになると、陸軍中將の妻として、英語の心得位なければ困る場合があるかも知れない。」と二人の子の母でありながら、新しく英語の勉强を一心にはじめました。三年の間休みなしに先生のところに通つて、むづかしい本を卷五までしつかり勉强しました。又「夫と子供の體につけるシャツや靴下洋服などは主婦の手で作らなければいけない。」と考へて、編物を習ひ、又當時はじめて輸入されたミシンも習ひました。洗濯物さへ決して召使にはさせないで自分の手で洗ひました。

大將は極く質素な方でしたので、夫人も亦夫に從ひ質素な暮しをしてゆきました。かねがね物見遊山等はせず、着物等も儀式等の外は、絹物等は一さい身につけませんでした。大將が學習院の院長の頃、明治天皇が學習院に行幸遊ばされました。此の日多くの貴婦人や令嬢と共に夫人も召されて、學習院へ行きました。身分ある貴婦人達は、立派な和服、美しい洋服で、馬車や抱車(カカエグルマ)で堂々と乘りつける時、目白驛からとぼ／／と歩いて、校門をくゞる黑木綿の紋付に袴をつけた老婦人がありました。誰もこれが乃木院長の夫人とは思ひませんでした。

「どこのばあさんだらう。」

夫人が門を行過ぎようとした時、門番は手をあげて呼び戻しました。

「どこへ行くのですか。」

「今日の御招待を受けて上りました。」
「どなたです？。」
「乃木で御ざいます。」
「えっ！。」
門番はびっくりして暫くは次の言葉が出ませんでした。
見渡す式場に參列した貴婦人の中で、靜子夫人の綿服は、全く人目を引く程粗末なものでしたが、その態度のどこか品位があつて、侵し難いのはさすがに見る人の眼には輝かしく映るのでした。便殿での特別の拜謁(ハイエツ)には、此の木綿服をつけた老婦人靜子が唯一人、その光榮に浴することが出來ました。
「乃木も俄に大勢の子供を持つて、なかなか世話のやけることであらう。」
と有難い言葉さへ賜つて、夫人は感涙に咽びながら御前を退きました。
美しい着物の光りも指輪の輝きも、心の光には及びません。
すべてがこんな調子で、極めて質素でしやれた事はちつともせず、何事も眞心をこめてしました。
毎日の生活もごく手輕にし、自分で臺所の仕事をし、又食事時に客があると、夫人は自分で育てた菜園の茄子をもいでお煮つけをし、豆腐のお汁や鰺の鹽燒をこしらへて、自分でお膳を運んでもてなし

ました。
「人樣がおいでになつたからといつて、急に變つた料理を店等に註文するのは、御馳走と言ふものでない。すべて身分につり合ふただけの物を、自分で拵へて出すのがほんとうの御馳走である。」
と何時も話してゐました。從二位功一級伯爵陸軍大將の夫人となり、ぜいたくをしようと思へば幾らでも出來る身分でありながらも、此の樣な質素な生活を五十四年間續けたのです。
誰に對してもへだてなく、常に親切で情深い人でした。殊に大將の部下に對しては同情して、よく世話をしました。それで皆、大將の武德に感ずると共に、一方夫人の恩德を深く〳〵感じてゐました。商人や其の他御用ぎゝ等にもわけへだてなく應對されましたので、夫人とつき合ふ人々はどんな人でも皆その德に感化されて、清い心で交際する樣になりました。
二人の子供の教育も、ほとんど夫人の手一つでした。先々は軍人になし度いといふ考へから、いつも、其の精神を養ふことにつとめ又丈夫な体格になし、そして種々の學問に精を出す樣にと氣をつけてゐましたので、二人とも大きくなつて、立派な軍人となりました。さうして日露戰爭の時は、大將と二人の子供と三人連れ立つて勇しく出征しました。ところが長男勝典は南山で、次男保典は旅順の二〇三高地で名譽の戰死をしました。小さい時から手とり足とりして大事に育てた二人の子供を、二人共失ふといふことは御國のためとは言ふもののどんなに悲しい事だつたでせう。しかもその悲しみ

を外に出さず、ぢつとがまんすると言ふことはどんなに苦しい事だつたでせう。御見舞の人が見えた時など

「私の子供が御國の御用に立つ事が出來てこんなうれしい事はございません。」

といつて涙一滴も見せませんでした。あまりの事に

「乃木夫人は一時に二人の息子さんをなくなさつたので、氣がへんになられたのではないかしら」

と思ふ程でした。

又戰爭中は、芝の琴平神社に日參し、皇軍の武運長久を祈願し、多くの婦人方が集つて慰問袋をこしらへる時も、一心に働き、いつも口ぐせのやうに

「私の主人が旅順で多くの部下を殺して、ほんとに陛下に對しても親樣方に對しても申しわけが御ざいません。」

と言つて居られました。大將は無事凱旋されましたが部下を多く殺したと言ふ事は、大きな苦しみでした。

明治四十五年七月二十日、突然明治天皇の御不例の事が發表されました。國民は老も若きも、男も女も宮城前にぬかづき、神佛に參詣し一心不亂に御平癒を祈り、日夜陛下の御容態を御案じ申し上げました。乃木將軍は殆ど食物ものどを通らぬまでに心配し、首をうなだれたまゝ神前に祈りました。

私の如き者の命は、何百何千召されても惜しくはございませんから、どうぞ陛下の御平癒を御守り下さい。」

將軍の兩眼からは熱い涙が拂つても〳〵瀧の樣に流れます。夫人も慰める言葉もなく、軍服のまゝ端然としてゐる將軍の側に膝を正し、共々に神前に額いて、一心不亂に祈りを捧げました。

將軍夫妻の眞心も、七千万國民の熱誠もそのかひなく、明治四十五年七月三十日、明治大帝は遂に神去りまし、天下は一時闇にとざされました。

遂に九月十三日が來ました。時刻は刻々と過ぎ遂に還り給はぬ大行幸の時刻は迫つて來ました。勝典保典の二人が生前勉强室にしてゐた二階八疊の間には、宮城に面した方に白布をかけた机を置き、明治天皇の御眞影をその上に奉安し、榊と御神酒を供へ、前には遺書と辭世の和歌三首が供へてあります。

午後八時十分、御靈柩の宮城御出門を知らせる第一の砲聲は闇を破つていん〳〵と轟き渡りました。大禮服をつけた將軍が靜かに御眞影の前にひれ伏すと、白衿無紋の黑服に袿衣（ウチカケ）に袴をはいた夫人も同じやうに頭を垂れました。將軍の右手に持つた大兼光の名刀がきらりとひらめきました。續いて夫人の白紙に卷かれた月山の白鞘の短刀がきらつと光りました。髪は一筋も亂れず、面には笑を含んで居ました。二つの遺骸がうつ伏しに倒れた姿は、丁度御尊影を伏拜む樣に見えました。全身全靈を

あげて大君に捧げまつつた將軍と、生涯を夫に殉じて、やさしく、強く、正しかつた乃木靜子夫人の一生はかうして終つたのです。將軍は六十四歳、夫人は五十四歳でありました。悲痛でしかも壯嚴な國民葬は、此の月の十八日、青山齊場で營まれました。

二人の英靈は、明治大帝の神しづまります桃山御陵近く、乃木神社、靜魂神社の神として、我々國民の上に、幾千年幾万年の後までも、尊い教を垂れ給ふことでせう。

將軍の辭世

うつし世を神去りましし大君の
みあとしたひて我はゆくなり

神あがりあがりましぬる大君の
みあとはるかにをろがみまつる

夫人の辭世

出でましてかへります日のなしときく
今日の御幸に逢ふぞかなしき

東郷益子刀自

あの強大なロシアと戰ひ、日本の名を世界のすみずみまで、輝かせた、名高い東郷元帥の母堂を益子と申します。

益子夫人は薩摩の武士、堀與三左衛門の三番目の娘で、二十才の時、同じ薩摩武士の、東郷吉左衛門實友にお嫁入りしました。

父は學問もよくでき、武げいにも、大へんたつしやでしたので、とても立ばなさむらいだといつて、知らない人は、ありませんでした。のちには、りつぱな、名高いとのさまである、齊彬侯のお耳に入り、郡奉行、高奉行、御納戸奉行等の、重大な職にあげられました。この重い務に、一生けんめいでしたので、家にゐることは少いでした。それで家のことは一切、益子夫人にまかせてゐました。夫人は、自分のせきにんの重いことを知り、いつもまちがひなく、りつぱに仕事が、できますやうにと神様に、お祈りしました。

益子夫人は、五人の男の子と、一人の女の子の母となりました。元帥は、小さいときの名を、仲五郎といひました。

母堂は、子どもたちを、心のきよく、美しい、人格の名高い人間に、育てあげたいものと、ひるも

夜も、心をくだいて、くしんしました。

子供たちが外から歸つてくるときは、やさしいでしたが、家にゐるときは、かへつてきびしいおかあさんでした。

母堂はけつして、子供を大目にみるといふことはしませんでした。叱るときもよいかげんの叱り方でなく、さいごまできびしく叱りました。それと同時にまた子供を、大そう、うやまひました。子供たちが夜ねてゐる枕もとは、どんなに急いでいるときでも、決して通らないで、かならず足もとの方へ廻つて通りました。

「この子供たちは、やがてお國のために、りつぱなはたらきをして忠義をつくさなければならない。たとひ親でもその頭の上をふむやうなことがあつてはならない。」

と家の人々にいひきかせてゐました。又物干ざを、たらひ、洗面器等すべて男と女ののをべつべつにし、物干ざをの下等けつしてくぐらせませんでした。お湯にも男の子よりも先に入ることはけつしてありませんでした。又家に上るときもいつも表から上らせ、台所などからは決して上らせませんでした。

男の子の頭の中にはいつも殿様がいらつしやるのだと思ひ、大事に大事に育てました。

仲五郎が七つばかりの幼いとき、或日父上のうまやで遊んでゐたことがありました。うまやには父

上の大事にしてゐる馬がつないでありました。しかしこの馬は大そう氣のあらい馬で、急にあばれ出しては、人を傷つけるやうなことがありましたから、母堂は、子どもたちに、馬のそばに近よるなといひきかせてゐました。仲五郎は母のいひつけをよくまもる子どもでした。がこのときはどうしたことか、みじかい竹の棒をふりまはして、馬の腹や背に止つた蝨を打たうと、一生けんめいになつてゐました。蝨が止つて血を吸はうとすると、馬は腹や背の皮を、ぶるぶるつとふるはせます。そこを目がけて、ぱつとうちます。うまく落ちるときもあつて、面白いでした。ところが馬は、これで大へん腹をたてたのであります。非常に怒つた馬は、仲五郎を前あしでけたぼし、大きな口で、がつと首すぢにくらひつきました。仲五郎は、馬の鼻づらをうつて、どうにか馬の口を、のがれることができましたが、困つたのは首すぢの傷であります。

「大變なことをした。」

と仲五郎は考へました。落ついてくると、母に、馬のそばにいくなと、きびしくいひきかせられたことが、思ひ出されてきました。けがも痛みも何でもありませんが、母のいひつけを忘れて、馬に近よつたことが、何よりも悔まれました。仲五郎は痛いのを、がまんして、だまつてゐました。ところがそれがあくる朝、わかつたのでした。

母堂は、毎朝子どもたちがおきると、一番上の兄から順々に、きれいにかみを、くしけづつてくれ

ました。これはもう昔からのしきたりで、仲五郎がまだまだ幼いときから、一度もかがされたことがありません。どんなことがあつても、家にねるときは、必ず母の手でゆつてもらひました。母がかみをゆつてくれるやうすは、とてもおごそかでした。毎朝必ず新しい元結を使つて、何か心に祈るやうにして、かみをゆつてくれる母の姿をみると、順ばんに待つ子どもたちの心はひきしまりました。そして、どんなことがあつてもかみだけは母にゆつてもらはなければならないやうな、氣になるのです。ですから、この朝仲五郎はいやでも母の前に坐らなければなりませんでした。とう〳〵首すぢの傷を母にみつかつてしまひました。

「馬にかまれたことより、そのきずをだまつてかくしてゐたのがいけません。かまれたときすぐうちあけなかつたために、傷が赤くはれあがつてゐます。もしこのきず口から毒でもはいつて、そのため命にかかわるやうなことになつたらどうしますか。」

と、きびしく叱られました。

「さ、仲五郎。だまつてゐないで答へなさい。お國のためにご奉公するからだを、何と思つてゐたのですか。自分一人の小さな恥を、かくさうとして、もしもご奉公できないやうなからだになつたら、何とおわびしますか。それこそほんたうのおく病者ではありませんか。自分のからだを、自分だけのものと思つてゐるのは、大おく病ものです。又大不忠者です。」

仲五郎はだまつて、母の青ざめた顔を、一心にみつめました。とう〳〵仲五郎は、手をついて、三度あやまらせられました。

一度は、母の注意を守らなかつたことを、

一度は、武士の子にあつてならないことをして馬にかまれたことを、

三度目には、お國につくす大じなからだをそまつにして、早く手あてをうけなかつたことを。

仲五郎には、この三度目のおじぎが、一番こたへました。

仲五郎は生れつき大そうすばしこい子どもでした。十才のとき或日田んぼの中を流れてゐる、小川のふちに立つて、小刀をふるつて「えいつ。」と小鮒のむれに切下し切下し、たちまち四五十匹を切つて、大そうとくいがつてゐました。このことを隣の人からきいた母堂は、仲五郎をひざ下に呼びつけて、みなりを正して、きりつとしたやうすで、

「武士は大勢の敵を破つてこそ めいよになるけれども、小魚を切つて何の自まんになりますか。」

ときびしくたしなめました。

「下に、下に―。」

といふ、先拂ひの武士の聲も高く、殿様の行列が近づいてきても、一向馬からおりて、ひざをついてお禮をしようとしない、四人のイギリス人がありました。

文久二年　　摩の殿さまの父上島津久光公が、江戸から鹿兒島へかへるために、武藏國生麥村を通つてゐたときのことであります。

英國人たち、珍しさうに、馬に乘つたまま行列を見おろしてゐて、きれいな行列のあちこちを指さしたり、中にはもつとよく行列を見ようとして、行列を横ぎつて、道の向ふがはへわたる者もありました。

眼の青い、髪の毛の赤い、からだの大きな、白天ぐのやうな顏をした外國人は、このごろしきりに蒸氣船や軍艦で我が國におしかけてきて、まるで日本人をみくだしたやうに、無禮にもいばつてゐます。これは日本人として、一ときもがまんのできないことであります。

「外國人をうちはらへ。」

「外國人を皆日本から、たたき出してしまへ。」

と言ふ聲が、國中にみなぎつてゐる時でありましたから、

「うぬ、無禮者―下にをらぬか！。」

と叫ぶより早く、先頭のまもりの武士たちは、大刀をぬいて、一せいにこの無禮な英國人を、きりたふさうと、とびかかりました。たちまち、リチャードソンといふ英國商人は、一刀のもとにきりすてられました。一人はうでをきりをとされ、一人の女はかみのけを切られただけで助かりました。生きのこつた者は、馬にのつて、どん〳〵にげてしまひました。

この生麥（なまむぎ）じけんが、英國せいふにほうこくされると、英國はすぐ幕府（ばくふ）に向つて

一、しつかりとした、おわびをせよ。

二、たくさんの、つぐなひ金をやれ。

三、英國人をころした人を、死刑（しけい）にせよ。

と、つよくいつてきました。

けれども、一向はかどらないので、あくる年の六月二十八日に、英國軍艦七隻が鹿兒島にやつてきて、

一、リチャードソンを殺した人を死刑にすること。

二、二万五千ポンドのつぐなひ金をしはらうこと。

の二つの要求書を出し、二十四時間以内に返じをせよと、大へんつよくいつてきた。

このしらせがひろがると、武士たちも、町の人々も、大へんおこつた。そして、

「けつして、英人をころした人はわたすことは出來ない。」又「つぐなひ金も一文もはらうわけにはいけない。」

「戰爭か　のぞむところだ　。」

と、口々にいひ、武士たちは皆、戰爭のみじたくをしました。そして自分の持場々々の砲台へかけつけました。

父上の吉左衛門は、このとき、かん軍として鹿兒島灣の入口にある、山川砲台へ向ひました。

四郎兵衛・壯九郎・平八郎の三人兄弟は、旗本勢として、殿様の本營詰となりました。

平八郎はやうやく十八才になつてゐましたが、つつ袖の羽織をきて、袴をはいて、東郷家の紋のうつてある、半首といふ陣笠をかぶつて、腰の帶には兩刀をぶちこんで、肩には火縄銃をかついで、とても、りりしく、勇ましい姿でした。

母は、一生けんめいに三人の子どもたちの、出陣の身支度を手傳ひました。いよ〳〵門をでるとき、三人の勇ましいわが子の姿を見送りながら、

「しつかい、やつちおくれ。負くんなよ。」

と、力强いはげましの言葉をあたへました。

島津公は、とう〳〵リチャードソンをころしたさむらひをひきわたすこともできないし、つぐなひ

金もはらうことはできないと答へられました。

もうすつかり、戰爭のじゆんびはできあがりました。英國艦隊でも戰爭のじゆんびをし、大砲にたまをこめたり、かくれ岩などにのりあげないため、海の深さをはかつたりしてゐました。

七月二日、前日からのあらしは、いよ〳〵はげしくなりました。空はどんよりとして、うす黑い雲が出てきて、大へんむしあついでした。霧島山の背に、はげしく黑い雲が動いてゐます。海は波があらく、英國艦隊は左右にはげしく、ゆれてゐました。と、このとき、急に英國艦隊は、重富沖につないであつた、藩の汽船を、三さうとらへていつてしまひました。砲台の勇士たちは、これを見て大へんおこりました。いよ〳〵「開戰。」「ほうげきかいし。」の命令がでました。

第一彈は、天保山砲台から、敵の旗艦ユリアラスに向つて放たれました。つづいて各砲台から、一齊に、どどどどどつとうちまくりました。その音が天地にとどろきました。

まづ、敵は祇園洲砲台に彈をあびせかけました。それから、各砲台をつぎつぎに、うちました。

雨と風はますますはげしくなつてきました。砲台のわが勇士は、はだかになつて、一生けんめいでした。町は、敵の彈があたつて、大火事になりました。

このはげしい戰の間、仲五郎後の平八郎は、二の丸の城をまもつてゐましたが、つぎに、砲台の方に、かせいに行くことになりました。平八郎は敵のたまの、どんどんとんでくるのも、かまはず、自

分の務にどんどんはげみました。

平八郎の母堂益子さんは、戰がいよ〳〵はげしくなりますと、まづ自分の子をはじめ勇士たちが、お腹をすかしては、十分の働きもできないと考へて、大きな鍋に薩摩じるを山のやうにたくさんにこんで、横からふつてくる雨風とたたかひながら、敵のたまの中もかまはず、一生けんめいに、陣所へはこんできました。半分はこわされた砲台のまはりを、きちがひのやうに、かけまはつてゐる勇士たちは、このおいしいさつまじるに、元氣をとりもどして又一生けんめいに、たたかふのでした。益子夫人は戰ふ勇士達に、このおいしいさつましるを上げ、元氣をつけて、やさしくしてやりました。しばらくして、つかれをやすめようと腰をのばしたとき、敵のたまがひゆうんとうなりをたててとんできました。そして益子夫人は、すなけむりの中にかくれてみえなくなつてしまひました。所が、すなけむりが風にふきとばされてみると、益子夫人は、もとのいちに、じつと動きもしないで立つてゐました。そして、かみの毛をかきあげながら敵かんをきつとにらんでゐました。

このやうに、沈着豪膽な母堂がありましたから、東郷元帥のやうにえらい人が、出られたのです。母堂は、いつも自分の子としてそだてないでお國の子として、お國のためにりつぱなおやくにたつ人となるやうにと、まごころこめて大事に大事に、そだてました。

山本信子刀自

〃偉人の母〃

昔から偉人といはれる人の後には、必ず立派な母があつたと云はれてゐます。

栴檀は双葉より芳しいとは云へその立派な芽を、そだてて下さる母がなかつたら、英雄も偉人も出て來なかつたでありませう。

肇國の聖地として名高いそして美しい此の鹿兒島には、多くの偉人が出ていらつしやいます。

そのえらい方々も、矢早り私達と同じこの城山の下で育つたり、朝夕に櫻島の雄姿を眺めて大きくなられたのです。

山本英輔大將といへば、皆さんもよく知つてゐるでせう。この人のお母さんは『信子』といつて、新照院町で少年英輔を立派に育てて下さいました。

後の世の人も『山本信子刀自』といつて御教を仰いでゐるのであります。

母の言葉

母堂は美しい山狹に早朝目をさまされると必ず、みそぎをされ、御祖神に禮拜してから次いで御先

祖の位牌に禮をされ冷え冷えとする黒土をふまれて、遙かに東方の遙拜を少年英輔にもつとめさせてゐられました。

母堂が英輔少年に何故尊崇の教育をとられたかといへば、一朝君國に急のある場合には、第一線に出て、立派に御國の楯として立つことの出來る日本男子にせねばならないといふ、母心の強い決心を燃えるやうに、深く肝に銘じてゐられたからであります。

母堂は英輔少年を戒められる時は

「お前の頭(かしら)には　大君がおはしますぞ。」

との一語でした。

英輔少年が臥床するのにも必ず枕をあたへ、洗濯なども少年の分は盥(たらひ)や物干竿まで別にし、その着物なども決して踏み越えるやうなことはありませんでした。

どんなに、わびしい貧しい毎日にも、せめてこの子にだけはと、魚の頭つきをあたへ、行く〳〵は人の頭に立つやうにと、靜かに心の中で念願してゐました。

この母上の優し眞心が、どうして英輔少年に通じないでおきませう。

又或る日、武岡の山の端に日がしづみ、烏も一い、二羽蒔(ねぐら)をさしていそいでいました。英輔少年は母と共に門邊に立つてゐましたが父親と一緒に樂しさうに、手を取つて歩いてゆく友達の姿を見て、思はず涙ぐんで、

「お母さん、僕にはないごてお父さんがないんだね。」

と母の手をぐひ〳〵と引つぱりました。しばらく、じつと考へ込んだ樣にだまつていられた母堂は、

「英輔どん、何をそんなに、涙なんか流してゐるんですか。英輔どん、よくお聞きき。お前のお父さんは、西郷どんの戰爭の時、あの武岡要塞で、天皇陛下の御爲に、勇ましく闘つて、誰が攻めても陷ちない砦(とりで)を攻め落して、立派に敵の彈丸(たま)にあたつて勇ましく、御戰死なされた。強い勇ましいお父樣でありました。……その強い立派な、お父樣の子が、女の子のやうに、めそ〳〵と駄々をこねて泣くとはなんですか。お前には、お父さんはゐなくとも　天子樣がおいでなさる。お前は大君の子でありますぞ、たとひ父上はゐなくとも　大君がおいで遊ばすではありませんか、また、こゝにこの母がしつかりとお前を守つてゐるではありませんか、もう泣くのは、およしなさい。」母のこの言葉を靜かに聞いてゐた英輔少年は、かるく頭をうなづいてみせましたが兩頬を流れる涙を右のひじを上にふきあげながら、お母樣のしつかりむすばれた口元をみつめたまゝ、思はず、につこりと微笑んで、「お母樣わかりました」とおわびしたのでした。

又或る霜の強い冬の日のこと、

英輔少年が友達と喧嘩して負けて泣いて歸つて來ますと、母堂は家の刀を取出して、

「さ、これで、仕返しをして來なさい。意氣地ない男子は、我が家に一歩たりとも入れることは出來ません。」と、雨戸をぴしやりとおしめになつてしまひました。英輔少年は、この母の言葉に、思はず、身ぶるいして勇氣が急に百倍した樣な氣持になつたといふことです。

英輔少年も小さい時は相當な、やんちや坊主で、亂暴者でした。時々駈けまはる時、石に轉んだりまた柱などで、頭や足などを、したゝか打つて泣き出すことでもあると、母堂は、うんと叱りつけて泣くことをお許しになりませんでした。そして

「さ、仕返しをなさい」

と云つて、その柱や石などを少年の自分の手で打ち返さしてゐたものでありました。

この話は鹿兒島の母性の立派な態度の話としてよく知られ、いひつたへられてゐることであります。

それで英輔少年も、友達と喧嘩して傷を負ふたり、また、着物を、めちや〳〵に引裂かれて來ても泣くわけにゆかず、母上に傷や着物の破れを見られるのもきらつて、着物の袖を顏にかぶつて歸つて行つたさうです、そんな時は、母堂は、わざと知らぬ風をして、かへつて、やさしく、いたわつて下さつたといふことです。

母堂のきびしい教育の中に、涙のあふれる樣な優しい暖い御心を御しのびすることが出來るのであります。

私共の朝毎に朗誦し又、ゆくすへこの國の人々が永久に唱へるでありませう。かの島津日新公の『いろは歌』のはじめの

古への道を聞いても唱へても
わが行にせずば　甲斐なし

の歌を、少年英輔の心の鏡として何時も唱へさせられたものでありました。そして「英輔どん、お前は、薩摩(さつま)の男子に生まれたかはりには、絶對に嘘をいふものでは、ありませんぞ。又理窟をいふものではありませんぞ、よいか、一生これを守りとほして行かねばなりませぬぞ。」と固く戒められました。

かうして母堂は少年英輔を日本の國の赤子　天皇陛下の御子として全精神と涙ぐましい慈愛とで教育されたのでありました。

このころは夜淋しい山にわざと旗取りにやらせるゞ膽だめしゞやゝ降參云はせゞ等がありました。

母堂はゞ英輔どん　降參遊びをして、うんと遊べゞと盛んに勇氣づけられたものでした。

五月頃になると甲突川の川原に、破れ傘を燒いて、曾我兄弟の父の仇討の孝道を偲び、或は寒夜赤穗義士討入の夜には、粟なつとを吸いながら夜を徹して赤城義臣傳を輪讀して讀みあかし益々精神を鍛錬し、身体を丈夫に務めたのでありました。

秋もやうやく深まつて、そろ〳〵美しい稲田の波もさわやかに感じられ、夜は凉しい名も知れぬ虫の音に、心よい夜がつゞくやうになりますと、市内十八健兒の舍は、毎晩の様に勇ましい行軍や軍歌の練習が始まります。

それは舊暦九月十五日の關原の戰の時の記念として伊集院の德重神社まで神詣りする準備なのであります。

青年達や少年達は美しいいかめしい陣羽織を着け刀を差して鎧具足に身をかため昔忘れぬ美しい扮裝を揃へて、夜詣りする準備でたゞみんな喜びいさんでせわしかつたのであります。しかし

英輔少年の家は、當時兵火に燒かれて何もありません。それに、買ふにも衣食さへ不自由するので餘裕のあらう筈がありません。子供心にもほしいとか、他の子供が羨ましいとは、決して口には出しませんでした。

母堂は、この英輔少年の心をさびしくお思ひになつて、

「英輔どん、心配せんでもよいよ、今度の妙圓寺詣りに、陣羽織を買ふてやりませう。」

とやさしく慰めておやりになりました。

その翌日から母の眼は美しく輝いてゐました。たつた一人の子、この大君の子に、はづかしめを受けない様に、立派な陣羽織を買ふてやるのだと一人で微笑みながら、朝から晩までは製絲講習に努められました。夜になりますと、晝のつかれも物とも思はず、夜更けるのも人知れず機織に針仕事にと一生懸命、勢出して、そのお金で仕立屋に陣羽織の仕上を依頼して、立派な陣羽織を求めて歸つてゐらつしやいました。

英輔少年は間もなくその夜は床につきました。母堂は無心に寢てゐる少年の枕元に置きながら、もしも自分がこの陣羽織を着せてやらなかつたら、この子も寂しい心を起し、心がひがみ、青雲の志を挫くのであつたかもわからないと思はれながら、すや〳〵と靜かにねむる少年のいぢらしい顏を、いつまでも〳〵打見まもつておられました。

英輔少年はその朝、妙圓寺詣りの夢を見ながら、ふと目を覺まして、顏をあげてみると立派な美しい陣羽織や物具が列べてあるではありませんか。思はず、

「あつ！。」と驚き、飛び上つて喜びました。

さすがに少年の眼には溫かいつゆが光つてゐました。

やがて、買求めた晴着のその眞紅の陣羽織を着て、意氣揚々と出掛けてゆく、吾が子の威風自づと備はつた後姿を見送つて、

「まあ、よかつた！。」と心のうちに嬉し泣きに泣かれたといふことであります。

この記念の陣羽織は、山本英輔閣下の邸に今も家寶として大切に秘藏されてあります。

母堂は、どこまでも、自分をすつかり捨身として、天にも地にも、父を知らぬ愛兒を愛育する爲に、どんな貧しさにも耐へ決して英輔少年の心をいぢけさせる樣なことはされなかつたのであります。

母のきびしい言葉、測り知れぬ溫愛の眞心、そして、優しい、叱りの言葉が、やがて少年に立派な大志を、心に高く揭かせられたのでありました。

親子の誓ひ

城山狹に吹き下してゐた寒い風も何時しかやわらぎ樹々の芽もそこはかとなくふくらみ小草の燃え葉が美しい芽をおちこちにのぞかせる春がいつの間にか南の國にも訪れてゐました。毎日のやうに背戸を登りつめては城山に登り、父がそして昔の偉人が打ながめて大志を抱いたでありませう、その雄大な櫻島の姿をみつめてゐた英輔少年は、高い遙かな山の頂をじつとみつめてゐましたが、何を思ひ出したのか、一もくさんに坂を下りて、家へ歸つてゆきました。そして、脫ぎすてるやうに下駄を脫いだかと思ふと、母の膝下にしつかりと坐つてゐました。

母は、余りの急な少年英輔の態度に、

「どうしたのです、何をそんなに」

英輔少年はしばらくだまつてゐましたが、「急に考へ出したことがあつたのです。」と云つて、思はず兩眼から涙を落してしまひました。この時の涙こそ、やがて海の大將となる決意の涙でありました。

母堂は「よく分りました」と心の中でおつしやつたのでせうか、しづかに口を開いて「英輔どん、今日は、よく泣いたね、いつもお前に言ひ聞かせてゐるやうにお父上は陸軍々人として天子樣に一身を捧げられたお方です、それで、英輔どんは、海軍々人として、皇國に一身を捧げて下さい。西南戰爭の時、此の鹿兒島の町は實に、悲慘なものでございましたぞ、敵を一歩も皇土に近寄らしてはいけませぬ。元寇の亂に壹岐と對馬は、蒙古の兵のために虐殺されたさうだが、國內の戰爭でさへ、十年戰爭には、この母は戰禍の悲慘なものであつたことを、今も見るやうですから、ぜひ、海軍々人となり、軍艦に乘つて、外敵を遠く海の上で打滅ぼし、日本に近づけないやうになさい。お前も今年十四才、此の母の言葉も、もうはつきりと分ることゝ思ふ、これから東京へいつてしつかり勉强なさい。そして、お父上樣の分まで、お働きをするのですよ。わかりましたか。」

さつきから、身じろぎもせず聞いてゐた少年は、やがて大きくうなづいて、

「母上よくわかりました。母上樣のお言葉に從ひまして、私は立派な、海軍々人となつて御覽に入れます。そしてお父上にかはつて　天皇陛下の御爲に一身を捧げて御奉公致します。母上樣の御心を

慰めまゐらせます。」と、はつきりと答へました。

母は子に、子は母に勵まし勵まされ、共々に心を一にし子のゆくすえを見守つてくれる母堂は晝は製絲工場で一心不亂に働らき夜になると、いよ〳〵上京する、英輔少年の晴着にもと、袴と夜具の糸を自分でくり、又機も織つて仕上て、英輔少年の上京を心待つたのでありました。

明けて四月の初旬、朝の陽射しが少年の行末を物語るかのやうに、あか〳〵と照り輝やき小鳥が葉洩れ日をうけて枝をつたへて飛び歩いてゐました。

幼ない時から、すみなれたこのあばらや、そして毎朝かゝつた古い井戸、苔の臭いまで、鼻にしみるやうな感慨を英輔少年は感じながら、今まできびしくもやさしかつた、たつた一人の母のもとを、遠くはなれて上京することを思へば、胸一杯で何もいえませんでした。

母の心づくしの袴を短かくはき、しつかりと襟本を合はせた、ひきしまつた少年の顔には、それでも、大きい、喜びの希望の色が漂ふてゐました。

母堂は、最愛の一人子を遠く立たせる思いに、身を切る思いであつたが、それでも少年英輔に向つて、

「母のことなどは、心配するでないぞ。たゞ勉強して下さい」

と言葉強く激勵されました。

その激勵の言葉をあとに東京の叔父のもとに情けの袴を穿いて上京したのが、將來海軍大將となり一世の師表と仰がれた第一歩であつたのです。

英輔は母の情のこもつた袴をはいて、僅か十四才で上京すると、すぐ慶應幼稚舍に入り、そして又攻玉舍にも學ばれました。その勉強中、いつも袴を見るごとに、母堂が側にいて見守つてくれてゐるやうな氣がして瞼に涙をうかべて感謝されたのでした。

そして

（今頃は、定めて恩愛かぎりなお母上が、製絲工場の女工として、骨身を削る勞苦をなめながら、私の大願成就の日を、待ちわびて居られることであらう。私は是非とも、父君に恥ぢない、忠義の日本男子として、御奉公の出來る身分になつて、祖先の光を輝やかすやうに、しなければならぬ）

と、母堂の恩愛を思ふごとに深く決心されたのでした。

そしてこの限りない母の恩愛に、報いるのには、必ず海軍大將にならなければならぬ。大將になるには勉強せねばならぬ、――と決心して、江田島の、海軍兵學校に向ふ一月前、その袴を新聞紙に包んで、その上に毛筆で、

「予ガ 海軍大將ニナル日コレヲ開キ見ン、明治二十六年十一月十六日之レヲ嚴封ス、大將ノ寶、山本英輔」

と、墨痕鮮やかに書き記して、これを秘藏物とされました。英輔閣下の心を鞭つたこの破れ袴は、山本家の家寶として今だに秘藏されてゐるのであります。

母堂が我が子の立身出世を心に念じつゝ、一筋〳〵と熱誠を織り込まれたこの袴、この袴こそ、何物にもかへがたい家寶であり、我が國のそして私達の心に、深く感銘を與へるものといはねばなりません。

記念の袴、開封の日

「男子志ヲ立テテ、鄕關ヲ出ヅ、學モシナラズンバ死ストモ歸ラズ。」との大志を胸にいだき心は常に母の上を離れず、遊びなれし新照院山狹の古びた家を忘れず、朝毎に、思ひ出の櫻島を心に描いては勉め勵み筆取る間にも暖い母のあのきびしいまなざしを忘れない少年に始めてあたへられる榮冠こそは、母子の勝ち得られた美しい月柱冠であるのでした。

恩愛の袴に誓ひをこめて、嚴封してから三十八年の久しきにわたり、空中樓閣を描いて、やがて、海軍大將親任を忝うされました。次で翌月勳一等瑞寶章を親授された後に、旭日大授章を拜領され、軍事參議官議定官と、全く人生最高の榮位をかち得られたわけで、誓ひの袴の開封される日が訪れたのでありました。

あたかも、昭和六年四月一日のこの日、上京中の母堂を中心に家族御一同集まられて多年御約束の開封が行はれたのでした。

母堂と孝子の互ひに見合はされる顏と顏！、只しばし、物もいはず、感慨無量、英輔閣下も無言、そこにおいでの人々は只たとへやうのない胸を壓する樣な空氣がみなぎつてゐました。

暫らくすると母堂は、この女の手一つで育てた子に、この榮冠を授け下された皇恩の廣大さに、感激されたのでございませう。熱涙が、双顏を傳ふて、とめどもなく流れ落ちるのでした。

この結晶、この榮冠を前にして、母堂ははるか皇居に向つて、靜かに遙拜されたといふことであります。

あゝ思へば母堂二十才の時、夫君山本吉藏大尉が武岡に戰死されて以來、天にも地にもたゞ一人の忘れ形見の英輔君を、今日あらしめんが爲の千辛萬苦を、甘受された長い〳〵歲月も流れ去つた、五十餘年も、只一瞬の思出となられたのでした。

その間、全身、全魂をさづけての祈願と職業への精勵、これこそ、子を愛する至愛の偉大な力が功成り、名遂げ、父母を顯はし、慈母の御恩に報いようとされる至孝の閣下との心情をあはれみ、神佛の御加護と皇恩との御力でなくて何でありませうか。

眞に日本國民の否、世界人類の師表として仰ぐべき母であり、その子ではありますまいか。

大尉の遺品である「明鏡」と記された鏡に御自分の姿をうつして、母子を御守り下さる様、お祈りされました。そして、悲しい時でも、又うれしい時でも、何時も、この鏡をみて反省してゐられました。

心をいつも、きれいにうつして、これから先行く道に、光明をおあたへ下さる様にとお祀りになつたのです。

やがて、功なり七十年の間、よき戰死者の妻として、或は、薩摩武士の妻として、武門の譽を傷つけず、良妻賢母として、世の人に仰がれる身となられたのであります。

英輔閣下が大將榮冠をいたゞかれた時、母堂は、鴻恩の有難さに感泣して

大君の深き御惠うけしけふ
昔偲へばなほぞうれしき

と詠まれ、英輔閣下も又

母ならで、誰にか見せむ故郷に
飾る錦の衣もありとも

と詠まれ、母子共に、皇恩の深さに、只感激感泣されたのでありました。

母堂は、此の世に生を享けられて、八十三ヶ年の長い生涯を、已れを全うしてなくなられたのであります。その撓まぬ努力と、崇高な奉公の精神力の活動とを思ふ時、轉た感慨無量であります。

母堂の御靈は、城山の老木の樟と共に何時までも世の人々に仰がれることでせう。

私共の朝に夕べに見上げる城山の木々の葉ずれの音と共に「信子刀自」の御教がしつかりと肝に銘ぜられるやうです。

私達の前途ははるかに遠く、そして高いのです。

大東亞をしつかり背負つて立たねばならぬ私達は山本大將母堂の教を身にしめて、一日々々の歩みをしつかり、ふみしめ、やがて明かるい世界への進軍をはじめやうではありませんか。

稅所敦子刀自

桓武天皇の御代から千年餘りの間日本の帝都であつた京都は山綠に水清くまことに美しい自然にめぐまれた所であります。

明治の紫式部とまで稱せられた稅所敦子はこの美しい風光の京都で生れました。「栂檀は二葉より芳し。」と敦子さんも幼い時から優しい利口な學問好きな栂檀の二葉のやうな子供でした。

丁度敦子さんが六七才の頃の事でした。お父さんのお友達が集つて、歌の會が開かれました時は美しい月がくわう〳〵とかゞやき軒にはつてあるくもの巣まで見えすくほど冴え渡つてゐました。幼い

敦子さんは愛くるしい瞳でぢつと見つめてゐましたがやがて

我が家の軒にかけたるくもの巣の
いとまで見ゆる秋の夜の月

と詠ひ出して並み居る人々を驚かしました。又十一才の頃でした。或る日近所の子供等と一所に郊外に遊びに出て、夜になつても敦子さん一人はいつかう歸つて來ません。お父さんもお母さんも大へん心配して近所の人達にもたのんで所々をさがしましたが、そのゆくへがちつとも分りません。氣ちがひの樣になつて嵯峨といふ所までさがしに行つたところがやつと敦子さんが見つかりました。嵯峨には虛空藏樣といふ名高いお社があります。敦子さんは只一人その御堂の中で何か一生懸命に御祈りをして居たのでした。虛空藏樣は、智慧や學問を授けて下さると聞いた爲に斷食をして祈願することを思ひ立つたのです。三日二晩といふもの何も食べず眠りもしなかつたので、顏色は青ざめ姿はやつれて居ましたが、それでも行儀だけはくずさずちやんと坐つて居ました。お父さんもお母さんもびつくりし夢ではないかとばかり、喜んですぐに連れて歸らうとしましたが、敦子さんは「私は少し御願ひの事がありまして七日の間この御堂におこもりを致したいので御座いますからどうか御心配なく御歸り下さい。」といつてなかなか歸らうとしませんでした。

これは敦子さんがかねてから才學のすぐれた立派な人になりたいと思ひこんで居た爲とう〳〵斷食

祈願まで思ひ立つたのでした。

敦子さんは父や母その他の人から色々すかされて、やう〳〵のことで三日目に連れて歸りました。やがてこの事が大評判になりその頃一番歌よみの上手であつた千種有功卿の耳にはいりました卿はすぐ使をやつて歌よみや學問を教へてやらうといひました。お父さんも敦子さんも大へんよろこびました。

それから一心不亂に勉强したので大そう學問が上達してこんな女はもう二人とゐないだらうと皆に賞められるやうになりました。それでも敦子さんは少しも高ぶる事はなく、まだ勉强の仕方がたりないといつて、少しもたゆまず勉强しました。

天保十三年敦子が十八の時お父さんはとうとうなくなりました。敦子さんにとつては、どんなに泣いても泣いても泣き足らない悲しいことであつたでせう。

それから間もない弘化元年二十才の時薩摩の藩士稅所篤之氏の所にお嫁に行きました。篤之氏は京都の薩摩藩のおやしきにつとめる身でありましたから、京都に來てゐました。篤之氏も敦子さんも同じやうに千種卿の弟子となつて和歌など學んで居りました。それから暇があると、畫も習つて大へん上手になりました。そしてむつまじくすごしてゐましたので稅所家は愛娘德子が生まれてからなほ春風がいつも吹いてゐるやうになごやかでした。でもその喜びは長くは續きませんでした。敦子さんが二十八の時篤之氏はふとしたことから床につき四十四を一期としてなくなりました。その後二番目の男の子

も生れて間もないのに又死に別れ敦子さんの悲しみははたに居る者の目にもいぢらしいくらゐでした。

そこで敦子さんはもう仕方がないので、篤之の故郷である鹿兒島に行つて德子を育て、よく姑に仕へることがせめても死んだ篤之氏への務と思ひ人々のとめるのも聞かず住みなれた京都を去つて一人娘德子の手を引き鹿兒島の城下へと旅立ちました。そのころの鹿兒島は他の土地から來た人のことを「ヨソモノ」と言つて大へんきらつて居りました。鹿兒島についてからの敦子さんは、ほんとにつらい日ばかりでした。稅所家は合せて十人暮し、その上お母さんは皆の人から鬼婆々々といはれるほどの意地惡屋でしたから、敦子さんの氣苦勞は並大抵ではなかつただらうと思ひます。けれども敦子さんは熱心に眞面目に姑につかへそのやかましい姑をうらむやうな事は少しもありませんでした。それどころか自分でもまだ〳〵働き方がたりないまだ自分の世話がゆきとゞかないと思つてます〳〵精出して立ち働きました。

又姑はお酒がすきで毎晩ほんの少しばかりのお酒とその後たくさんの水を飲んで休むくせがありましたので、夜中から明方まで便所に何時も行つたりもどつたりしました。敦子さんはいつも姑が起る前にちやんとろうそくをつけて障子のそばに立つて居て、手をとつて案内し、手洗ひの時には自分でひしやくをとつて、水をかけてあげ、丁寧に手をふいてあげたりしました。それが三百六十五日一夜も一回もかゝした事はありませんでした。

姑の食事も自分で料理し、髪も毎日ゆつてあげました。氣分が惡くて他の仕事が出來ない時でもこれだけは止めませんでした。こんなにまで親切にしてあげても姑は少しもありがたいと思はずつらく當つてばかり居ました。或る日、敦子さんがいつものやうに臺所で働いて居ますと、敦子々々としきりによぶ聲がしますので急いで行つて見ると、姑は　いやな〳〵にがい顏付で「世間の人はよくわしの事を鬼婆々々といふさうだが、お前は歌が上手だから一ッ鬼婆といふ題で私の目の前で歌を詠んで見せよ。」といつた。すると敦子さんは例の愛嬌ある顏に笑を浮べてすぐに

佛にもまさる心と知らずして
鬼ばゞなりと人のいふらん。

とよみました。今まであれほどいぢの惡かつた姑もこの敦子さんのやさしい心に動かされ、大へん感じてそれからは生れ變つたやうに佛のやうな心となつたさうであります。

始めはお話をするのもいやだといつて居たよそものの敦子さんを非常に可愛がるやうになり、しまひには何事をするでも敦子さんがしたのでなければ氣にいらないといふ風になつたさうでありました。此の時の敦子さんの喜びはどんなであつたことでせう。

又敦子さんは主婦として儉約を守りました。御飯をいたゞいた後、下女等がお臺所をかたつけたあとを見ますと、いつでも御飯粒の洗ひ流したのが流しにすてゝあるので始めは人にしられない樣そつと皆拾ひあげてよく洗つて食べて居りました。それでも、やはり下水等に落ちたのは拾ひあげる事が

出來ませんので大きな布の袋をこしらへ之を臺所にさげて洗ひ流しの御飯粒は皆その中に入れる樣に下女にいひつけて夕食の時自分一人で食べたさうであります。その他着物やお道具も同じ樣に少しも、ぜいたくにせず儉約してつかひました。敦子さんは夫に分れてもその堅い心で夫に對しての道をどこまでも守り姑に對しては親切に子供を可愛がり實に感心せずにはゐられず敦子さんの麗はしい言葉や行は、ます〳〵薩摩藩中に知れわたり、女子の鏡婦人のお手本といつて尊ばれる樣になりました。

時の藩主島津齊彬公は敦子さんの事を聞かれ深くその行ひを賞し公の六男哲丸樣の守役にしました。時に敦子さんは三十三でありました。敦子さんは眞心をつくして若君のことに力をつくしたので齊彬公も「立派な守役をたのんで何よりの仕合せだ。」と大へんよろこびました。ところが其の翌年齊彬公は急に亡くなられ又その翌年には哲丸樣が亡くなられました。敦子さんはあまりの悲しさに、若君の後を慕つて死なうとしましたが、姑が敦子さんの手にすがり「このばゞが一生の杖柱ともたのむおまへが今こゝでなくなつては何を樂しみに生きてゐることが出來よう、どうぞ思ひ止つてくれ。」と涙流して止めたので思ひ止りました。

文久三年久光の養女貞姫が近衛家に行く時敦子さんは老女といふ役目でつきそうて行きました。老女といふのは侍女の頭であります。

五十一歳の時には權掌侍となつて、宮中へ仕へました。才學が人にぬき出てゐる上に大へん行の正しい忠義の心の厚い人でありましたから　天皇陛下からも皇后陛下からも、一番可愛がられました。

敦子さんは毎年一日、十五日、二十八日にはきつと水垢離をとり火を焚く事をやめて生米をかんで兩陛下が安らかにおはしますやうに神佛に祈りました。

或る日敦子さんが陛下のお食事の時御給仕をしましたところが、陛下は「婆よ、この肴を分けてつかはすから皿をもつて參れ。」と仰せられて御自分で分けて下さつた事もありました。

敦子は明治八年に、宮中に仕へる樣になり精出して勤める間に二十六年間は過ぎてしまひました。明治三十三年には早や七十六才といふ年になりました。皇后陛下は四五年前から、「もう年よりであるから毎日出仕するには及ばぬぞ。」といふ有り難い御言葉を賜はりました。それでも忠義深い敦子さんは、一日もかげずに勤めましたが、とう〳〵三十三年二月四日午後四時風邪がもとゝとなつてねむる樣になくなりました。

內の人達は云ふまでもなく、日本國中の人達がこのかしこい偉い婦人の死をつたへ聞いて、大へんかなしみました。

恐れ多い事には　天皇皇后兩陛下は敦子さんの病氣が重いといふ事をお聞きになつて、二月四日の夕方特に御使をおつかはしになり、掌侍といふものにされ、正五位を賜りました。

敦子さんは青山の墓地に葬られました。

皇后陛下は特に敦子さんの生前の功や苦勞を御たゝへになり御自分のお金で墓石をお建てになりました。

嗚呼敦子女史は實に男子も及ばない立派な人でした。溫良貞淑で婦人としての道を守り忠義をつくした偉い婦人でありました。日本國中の婦人のかゞみであり、私共母性の生きたお手本とすべき御方であります。

「薩摩三訓」

負けるな
弱い者をいぢめるな
うそを言ふな

編輯後記

山河麗はしく偉人賢夫の輩出した此の鄕土に生を受け、日夜、此の大自然の尊さと大先輩の傳統的精神に生きる我等は何たる幸福であらう。

我等は此の偉大なる鄕土の尊さを常に肝に銘じ、之れを讃へ之れを仰ぎ、此の精神遺業を受繼いで、大先輩の高恩に報ゐ、我等の子孫に恥ぢざるの修行、錬磨に日夜努力しなければならない。

此の意味に於て我が少年團は此處に讃鄕讀本を編纂して、十指に餘る我等の大先輩の言行偉德を集錄し、朝夕靜思熟讀して少年團精神の昂揚に勉めたいと思ふのである。

此の讀本の編輯に當り、團長始め諸先生方の御苦心、御努力は勿論、第二中學校長池田俊彥先生の御熱誠なる御指導に對し、我等一同眞心から感謝せねばならない。

我等はよく此の讃鄕讀本の意義を解し、基地訓練に、早曉訓練に、又一般訓練によく之れを朗誦し、味讀研究し、而して薩摩傳統の精神に强く生き、忠良なる皇國臣民となつて、大御心を安んじ奉らねばならないと思ふ。

昭和十七年十二月八日印刷
昭和十七年十二月廿五日發行

鹿兒島市山下國民學校
編輯兼發行者　永瀨親雄

鹿兒島市新照院町一番地
印刷人（南鹿一五五）鹽官榮

鹿兒島市山下町一番地
印刷所　鹿兒島縣教育會印刷部

431
151

終